

90-19

野口保興著

中等教育
帝國大地誌

東京

成美堂
目黒書店
合梓



中等帝國大地誌

例言

- 一 本書は中等教育に於ける地理科の教授に關し參考の資に供せんが爲に編纂せしものなり、題して帝國大地誌と云ふは穩當ならざるの嫌あるも漸次に大成せんこと期するあるのみ
- 一 本書中に大小二様の活字を用ひしは主要部と補助部との區別を明確ならしめんが爲めなり
- 一 本書中に米突的度量衡法を併用せしは該法が論理上最良のものたるのみならず法律上我が國の度量衡法と成りたれば之が習用を普及せしめんが爲めなり

一米突 三尺三寸
 一秆 九町十間
 一櫃 三分三厘
 一耗 三厘三毛
 一方秆 百町八段三畝十步
 一方粕 一町二十五步
 一坵 二百六十六畝六分七厘
 一噸 或は佛噸 二百六十六貫六十七匁
 而して一方里は一千五百五十五町二段歩に均しうして
 方秆一五四二三に當れり
 一米突法に屬せざる度量衡の中にて本書に用ひたるもの
 を掲げんに

一哩 陸上に於ける距離を測るに用ふ 一六〇九、三二四九 十四町四十五間
 一涅 一に海里と云ふ海上に於ける距離を測るに用ふ 一八五一、八五 凡十六町九分七厘五毛
 但、一涅は子午周の一度弧の六十分の一即、子午周の一分弧の長に當る
 一節 一五、四三二八 八間二尺九寸二分
 但、一節は涅の百二十分の一即、子午周の半秒弧の長に當る
 一薄 二碼に相當す 一八二八八 六尺三分
 一噸 一に英噸とも云ふ 一〇、一六〇四 二百七十貫九百四十六匁
 一 温度は總て攝氏寒暖計即、百度法に依れり
 一 本書を編纂するに當りて参考せし書籍雜誌、地圖等の中にて最、得易きものを列記すれば次表の如し

書目	冊數	著者若ハ發行者
日本地誌提要	一	內務省地誌課
地質要報	二	地質調査所
日本地質學	三	神保小虎
震災豫防調査會報告	一	震災豫防調査會
日本氣候學	三	小出房吉
日本地文學	一	矢津昌永
日本水路誌	一	海軍水路部
海流調査報告	二	和田雄治
帝國統計年鑑	一	內閣統計局
國勢一斑	一	內務省總務局
臺灣總督府第二統計書	一	臺灣總督府民政部
市町村別現住人口表	一	內閣統計局
日本佛教史	一	足立栗園
職員錄	二	內閣官報局
陸軍一斑	一	久留嶋武彦

海軍一斑	長尾耕作
日本山林一斑	柴田榮吉
林產物製造法	白杵永次郎
畜產汎論	高見長恒
畜產各論	田口普吉
家禽新書	高橋要亮
栽桑篇	吉永慶正
養蠶篇	吉永慶正
水產學大意	竹中邦香
日本重要水產解説	大日本水產會
日本海鹽製造法	地質調査所
農業大意	大橋又太郎
作物篇	高田鑑三
肥料篇	原照
農産製造學	楠巖
日本酒釀法	矢木久太郎
煙草篇	奥村順四郎
製茶篇	高橋橋樹

製糖篇	味噌醬油篇	工業大意	工藝志料	製絲篇	綿業論	日本製紙論	化學工業全書	大日本織物誌	大日本產業事蹟	日本商工要覽	商業大意	重要商品學	日本物產地誌通覽	鐵道局年報	船舶論	稅關及倉庫	日本名勝地誌
—	—	—	—	—	—	—	七	—	二	—	—	—	—	—	—	—	九
石井淳二郎	西村榮二郎	松永新之助	帝室博物館	池永慶正	井上甚太郎	吉井源太	高松豐吉外二名	須永金三郎	大橋雄也	農商務省商工局	森一兵	石川巖	農商務省文書課	遞信省鐵道局	赤松梅吉	岩崎昌	野崎左文外二名

三百諸侯	日本百傑傳	大日本農功傳	臺灣諸嶋誌	臺灣小地誌	日本風景論	輯製日本全圖二十萬分一	北海道實測切圖二十萬分一	假製臺灣全圖二十萬分一	北海道地形圖五十萬分一	大日本帝國全圖百萬分一	大日本帝國地質圖百萬分一	海圖	大日本管轄分地圖	地學雜誌	氣象集誌
—	—	—	—	—	—	一組	一組	一組	一部	一部	一部	重要港灣	一帙	每月一回	每月一回
戶川殘花	川崎三郎	農商務省農務局	小川琢治	山科宣次	志賀重昂	參謀本部	北海道廳地理課	參謀本部	內務省地理課	地質調查所	地質調查所	海軍水路部	中村鍾美堂	地學協會	氣象學會

帝國大地誌 書目

地理之歷史	每月一回	地理歷史研究會
Almanach de Gotha	每年一回	Justus Perthes
The Statman's year-book	每年一回	Macmillan and Co.

八

中等帝國大地誌

目次

緒言.....一頁

自然之部

位置.....八

境域.....一〇

廣袤.....一〇

面積.....一一

洋海灣港.....一三

海峽.....一五

嶋嶼.....一六

帝國大地誌 目次

一

半島	一九
地峽	二〇
地角	二〇
海岸線	二一
海流	二五
地質構造	二九
山誌	三一
水誌	四三
其一 河川	四七
其二 沼湖	六〇
地勢	六四
氣候	七二
其一 溫度	七二

其二 雨雪	八二
其三 風	八八
天產	八九

政治之部

住民	九三
其一 人口	九三
其二 種族	一〇五
其三 教育	一二〇
其四 宗教	一二三
政治	一二八
其一 政體	一三一
其二 行政區劃	一三七
(一) 畿道國	一三八

(一) 府縣道廳總督府……………一四二

(二) 司法區……………一六二

 其三 兵備……………一六三

 (一) 陸軍……………一六四

 (二) 海軍……………一八〇

 其四 外交……………一八七

 其五 財政……………一九二

生業……………一九九

 其一 森林業……………二〇〇

 其二 養畜業……………二〇八

 其三 養蠶業……………二一一

 其四 水產業……………二一四

 其五 農業……………二二三

(二) 農產原料……………二三四

(二) 農產製品……………二二六

 其六 鑛業……………二二三

 其七 工業……………二三七

 其八 商業……………二四九

 其九 交通業……………二六一

處誌……………二八〇

中域……………二八一

 第一 本州區……………二八一

 其一 中部……………二八二

 關東地方……………二八二

 東海地方……………二九八

 北國地方……………三〇八

 其二 北部……………三一三

 其三 西部……………三二四

近畿地方……………三二四

中國地方……………三三四

第二 四國區……………三四六

第三 九州區……………三五二

北域……………三六二

第一 十州嶋……………三六八

第二 千嶋列嶋……………三七四

南域……………三七七

第一 沖繩群嶋先嶋列嶋……………三七七

第二 臺灣嶋澎湖群嶋……………三八一

帝國大地誌

緒言

野口保興著

宇宙

宇宙六合の廣大無邊なるは實に吾人の想像の及ばざる所なり、明炎たる
 太陽と較する巨大の太陽も蒼空にありては其の一小部分を占むるに過ぎ
 ず、太陽に比すれば一層宏大なる恒星も天涯にありては點々たる螢火の如
 し、彼の銀河と稱する白雲狀の一帶は無數の星辰の群簇するものなりと云
 ひ、一秒時に七萬五千里を走る光線も最近の恒星より我が地球に達せんに
 は三年七ヶ月を費さざるを得ずと云ふ

我が地球は斯る宏大なる宇宙間に浮遊する一個の世界なるが其の大は
 僅に太陽の百二十五萬分一たるのみ、然れども我が地球の如き小世界は他
 に幾多もありて等しく太陽を中心とし其の周に廻轉し以て一團の小宇宙
 帝國大地誌

地球

を構成せり

斯の如く太陽より光熱を受けて太陽の周りに回轉する天體を名づけて太陽系の遊星と云ふ其の大なるものは木星土星天王星海王星にして其の中心にあるを火星地球金星水星とす其の他に尙數百の遊星あり又稍大なる遊星には之に附隨して廻轉する小遊星あり名づけて衛星と云ふ我が地球を中心として廻轉する月の如き是なり而して木星土星天王星海王星等も亦各若干の衛星を有すと云ふ

地球は其の直径の一を軸として自ら回轉し以て晝夜の差別を生じ更に又太陽の周りに回轉して四季の變化を起すものなりされば其の表面上に於ける各地の晝夜は位置に依りて長短ありて必しも二十四時間を以て一晝夜と爲さず或は四十八時間の一晝夜あり或は半年の晝と半年の夜の交代するあり從て氣候にも寒温熱の別を生じ又濕候乾候を現出せしむるに至るなり

地球は宇宙の廣大に比すれば塵埃も管ならざる細微の一小世界に過ぎ

されども吾人より觀れば球體の形状を呈する一大塊にして其の周圍は四萬軒即ち凡そ九千八百十五里あり一時間に二十哩を走行する汽車にては五十日を費さざれば一周するを得ざるべし又其の直径は一萬二千七百三十二軒にして面積は凡そ五億一千万平方軒なり

地球の皮殼は地質學者の所謂岩石より成るものなれども其の表面の凡そ四分の三即ち三億七千四百萬方軒は凹窪にして鹹水の浸す所と成りて海洋を爲し殘りの四分の一即ち一億三千六百萬方軒は水面より露出して陸地を爲せり而して此の海洋と陸地との分布は一樣ならずして或は水界に偏する部分あり或は陸地の多き部分あり以て水半球陸半球の別あるを致せり且又海と陸とは互に錯交して海の陸間に挟まらるゝあり陸の海中に突出するありて海に五大洋の別を來たし陸に五大洲の區分あるを見るに至れり

五大洋とは太平洋大西洋印度洋南北の太氷洋を云ふなり其の太平洋は五大洋中の最、廣大なるものにして殆ど地球の半面を蔽はんとす實に洋帝國大地誌

中の洋なるものと云ふべし、之に次ぐを大西洋とす、狹長にして陸と陸との間に挟まらる、洋中の海なるものと爲すべきか、印度洋に至りては三方に陸地を扣へ其の廣袤も亦前の二大洋に如かず、洋中の灣なるものと云ふべきか、而して南北の太氷洋は南北の二極と稱する部分を圍繞せり

五大洲

五大洲とはアヲア、オセアニア、ヨーロッパ、アメリカを云ふなり、而して廣袤の大なるアヲア洲を以て第一とし、之に次ぐをアメリカ、アフリカ、ヨーロッパとす、オセアニアの如きは五大洲中の最、小なるものなり

五大洲中の最、廣大なるアヲア洲の東、五大洋中の最、渺茫たる太平洋の西に方り、天龍の將に雲上に登らんとする形狀を有せる一群島あり、東西南北、皆碧清たる海原にして、夏と雖、暑からず、冬と雖、寒からず、山水明媚、風色絶佳にして、土地肥沃、五穀豊穰なり、斯る幸福有望なる地に據りて國を建て、萬世一系の聖天子を戴く國の名を何と云ふ、即、我が大日本帝國なり

大日本帝國
經緯度

然り而して我が帝國が地球の表面上、如何なる位置にあるやを確定せんには、地理學者の所説に係る經緯度に依らざるを得ず、而して經緯線な

赤道

るものは地球の表面上に假設せられたる想像線なり、抑地球は地軸と稱する一の假設線の周りに回轉するものなれば、此の軸が地球の表面を貫く所の點は太陽の周りに公轉（一年を一生運動）を爲すも、地球の自轉（一日を一生運動）には關係せず、斯の如き點は地球の表面上に二つあり、名づけて南北の二極と云ふ、此の二極點を通過する圓周は幾何學上の所謂球の大圓なるものにて、何れも經周即、經線なり、然るに同じ經周上にある土地は午の刻若しくは子の刻を等しうするが故に、經線の名を子午線とは云ふなり、又地球の中心を通過し、地軸と正交する一の平面が地球の表面を截過し、以て作爲する所の圓周は地球の表面を二つに等分する大圓周にて、名づけて平分周、或は赤道と云ふ、此の赤道の北にある半部を北半球と云ひ、南にあるものを南半球と云ふ、而して此の赤道と並行する平面が地球の表面を截りて爲す所の圓周は幾何學上の所謂小圓にして、即ち緯周、或は緯線と稱するものなり

子午線の長は、何れも地球の大圓周に等しきを以て互に相等しく、緯線は赤道を遠かるに従ひて漸く減縮し、兩極に至れば終に一點と成るなり

帝國大地誌

此等の經周並に緯周は素より無數に作り得べきものなれば之に依りて土地の位置を指定せんには一定の法則を以て一定の標準より起算せざるべからず

赤道が緯線の基線として用ふべきものたるは勿論にして之より起算して南北の二極までの弧線を九十度づゝに區分せり而して一度を六十等分したるものを一分とし一分を六十等分したるものを一秒とせりされば緯度は赤道より北にある土地に就きては北緯何度何分何秒と云ひ南にあるものに就きては南緯何度何分何秒と云ふなり

本初子午線

經線の基線即ち本初子午線の撰定は緯線の基線に於けるが如く單簡ならざりき往昔はカナリア群島中のヒエロ島の子午線を以て第一子午線として用ひしことありしが其の後各國概し其の都府を通過する子午線より起算することと成りて實際上大なる不便を感じたり斯る弊習を除去せん爲に明治十七年を以てワシントン府(アメリカ合衆國にあり)に於て開きたる公會はシリニツナ(イギリス國にあり)の天文臺を通過する子午線を以て本初子午線と爲すこ

とに議決したり然れども參列諸國の中にてフランス其他二三の國は不幸にして此の決議に不同意なりしが本邦の如く贊同の意を表したるものは其の數甚々多かりき而して本初子午線より起算して東西に各百八十度づゝに區劃し度分秒の關係の如きは緯線の例に依れりされば經度は本初子午線より東にある地に就きては東經何度何分何秒と云ひ西にあるものに就きては西經何度何分何秒と云ふなり

119.20
116.32
21.5

位置

自然之部

●位置

我が帝國は舊世界の極東に位せる島嶼國にして旭日東より出づるに因みて國號を日本と云ふ此の大日本帝國はアヲア(亞細亞洲)の東端太平洋の西北隅にあり故に國の全部は北半球内にあるなり
茲に帝國の全部並に其の主要部たる五大島の極點の經緯度を指示すれば實に左の如し

極西	澎湖島花嶼西端	東經	一一九、二〇
極東	占守島東端	同	一五六、三二
極南	臺灣島南岬南端	北緯	二一、四五
極北	阿賴度島北端	同	五〇、五六
極西	神田崎	東經	一三〇、五二
極東	閉伊崎	同	一四二、〇四
極南	海崎	北緯	三三、二六

帝國大地誌

極北	大同崎	同	四一、三一
極西	オハナ岬	東經	一三九、四六
極東	納沙布岬	同	一四五、四八
極南	白神岬	北緯	四一、二四
極北	宗谷岬	同	四五、三一
極西	佐田崎	東經	一三二、〇一
極東	蒲生田崎	同	一三四、四八
極南	鹿野崎	北緯	三二、四二
極北	觀音崎	同	三四、二四
極西	下神崎	東經	一二九、三四
極東	雀望崎	同	一三二、〇五
極南	佐多崎	北緯	三一、〇〇
極北	城山	同	三三、五八
極西	國聖港	東經	一二〇、〇三
極東	三貂角	同	一二二、〇四

極南 南緯
極北 北緯

一〇
北緯 二一、五三
同 二五、一六

● 境域

吾が國の東は渺茫たる北太平洋にして、昔時は際涯なき大海原と思ひし太東洋なり、北は千島海峡、北海(オホーツク海)、宗谷海峡を隔ててアマロシヤと境し、西は日本海、朝鮮海峡、黄海、臺灣海峡を挟みてシベリア、朝鮮及び清國に隣り、南はパシフィック海峡を隔ててアメリカ領のヒリッピン群島に對せり

● 廣袤

吾が國は數多の島嶼より成るものにして其の數は四千に近しと稱すれども之を大別して五大島、五中島、二列島、二群島となすを得べし、五大島とは本州島、四國島、九州島、十州島、臺灣島を云ひ、五中島とは淡路、佐渡、隱岐、壹岐、對馬の五島を云ひ、二列島とは千島、琉球の二列島を云ひ、二群島とは小笠原及び澎湖の二群島を云ふなり

境域

廣袤

北

面積

此等の島嶼は地理學者の所謂東アリア沿岸島嶼に屬するものにして長は一千數百里に達するも幅は至りて狭く六十里以外に出づることなし

● 面積

全國の面積は凡そ二萬七千一百方里即ち凡そ四二、〇〇〇方里にして其の主要なる部分の面積は次の表に依りて知らるべし

	本地	屬島	合計
本州島	一、四四九、二二一	七八、九一	一、四五七、一三二
十州島	五〇五六、七八	五、二二	五〇六一、九〇
九州島	一三二一、八六	三〇五、六八	二六一七、五四
臺灣島	二二五三、二四	六、二六	二二五九、五〇
四國島	一一五一、二四	二九、四九	一一八〇、六七
佐渡島	五六、三三	—	五六、三三
對馬島	四三、九五	〇、七七	四四、七二
淡路島	三六、五五	〇、一四	三六、六九

帝國大地誌

陸岐島	二一、八八	〇、〇一	二一、八九
鹽岐島	八、五五	〇、〇八	八、六三
千島列島	一〇三三、四六	一〇三三、四六	一〇三三、四六
琉球列島	一五六、九一	一五六、九一	一五六、九一
小笠原群島	四、五〇	四、五〇	四、五〇
澎湖群島	八、〇七	八、〇七	八、〇七
合計	二、六六三、五三	四二六、四〇	二、七〇六、九三

本邦の地積を方寸に改算すれば四十一萬七千三百九十六方寸を得るを以て之をアツア全州の地積四千四百五十萬方寸に比すれば其の百七分之一に當れり而して當今世に強大國と稱せらるる列國の面積と本邦の面積とを比較すれば實に次表の如し、

イタリヤ	二八、七〇〇	ドイツ(全部)	三一四、〇〇〇
イギリス(本國)	三一、五〇〇	フランス(全部)	三八〇、〇〇〇
日本	四一、七四〇	アメリカ合衆國	九二二、二三七〇
ユスバニア	五〇、四六〇	清國	一一〇八、二一〇〇

フランス(本國)	五三、六四〇	ロシア(全部)	二二四三、〇〇〇
ドイツ	五四、〇七〇	イギリス(全部)	二八〇八、七〇〇
エスタトライヒ	六七、三四〇	アツア全洲	四四五〇、〇〇〇
ウシガルメ			

● 洋海灣港

洋海灣港の如き地理學上に用ふる名稱に就きて一言せん、地球全面の殆ど四分の三を占むる水面の廣大なる部分を太洋。或は單に洋と云ひ、太洋の一部にして陸地の間に進入せるものを海と稱す、又灣と云ふ名は太洋若しくは海の一部にして甚しく陸地に進入せるものに附するなり而して港の如きに至りては唯、狭小なる灣と云ふに外ならずして船舶を碇繋するの便を與ふるものなり

我が帝國は太平洋中の北西部に於て隆起せる島嶼なれば其の周圍にあり、海灣港は悉く太平洋に附屬せり而して其の中にて稍、著しきものを列舉すれば左の如し

帝國大地誌

洋海灣港

北海(オホーシク海)

太平洋

根室灣 厚岸灣 膽振灣 函館港

陸奥灣野邊地灣 青森灣 宮古港 釜石港 牡鹿灣 松島灣 東京灣横須賀港 横濱港

浦賀港 相模灣 下田港 駿河灣江ノ浦 清水港 鳥羽港 伊勢灣湊美灣 知多灣

大阪灣(堺湾)

土佐灣

白杵港 津久見港 佐伯港 細島港 内浦灣

蘇門港 花畑港

西海(東支那海)

鹿兒島灣 大浦港 八代灣 天草灣 千々岩灣 島原灣

有明灣(筑紫海) 長崎港 佐世保港 鯛ノ浦(大村灣) 伊萬里港 基隆港

南海(南支那海)

南灣

臺灣海峡

打狗港 安平港 國聖港 鹿港 淡水港

日本海

唐津灣 福岡灣 若松港 美保灣 若狹灣津和野港 小湊港 宮津港 敦賀港

七尾灣 富山灣 小樽灣

瀬戸内海

播磨海 兒島灣 吳港 宇品港 伊豫海 別府灣 周防海

●海峡

海峡とは海の一部にして陸と陸との間に挟まるる狭長なるものを云ふ。而して此の海峡は二つの海の間を連絡するが故に航海上に於て利便を與ふるに甚だ重要な天然の運河とも云ふべきものなり。茲に我が國の重なる海峡を列擧すれば次の如し。

宗谷海峡 千島海峡 樺太海峡 丹根前海峡 根室海峡 津輕海峡 鳴門

帝國大地誌

海峽 由良海峽 明石海峽 佐田海峽 赤馬關海峽 大隅海峽 平
戸海峽 壹岐海峽 對馬海峽 朝鮮海峽 臺灣海峽 澎湖海峽

●島嶼

陸地の廣大なるものに大陸と云ふ名を附し而して陸地の小部分にして
四圍悉く海を控るものあり名づけて島と云ひ又島の細小なるを嶼と云ふ
なり

數多き島嶼の群集せるを名づけて群島と云ひ島嶼の集りて一列を爲す
を列島と云ふ

我が帝國が四千に近き島嶼より成れるは既に知れる所たり今左に五大
島及び其の他に屬する島嶼に就きて稍著しきものを列記せんとすの島名
に數を記せるは周囲
の里數を知らるべし

- 千島列島(六一三)
- 阿瀬度島(二〇)
- 占守島(四五)
- 波羅茂知島(一七〇)
- 温爾古

島嶼
群島、列島

- 丹島五〇
- 捨子古丹島(三五)
- 新知島六〇
- 得撫島(九二)
- 擇捉島(二八〇)
- 色丹島(四五)
- 國後島(一六〇)

- 十州島(五八三)
- 小島 大島
- 奥尻島(一四)
- 檜尻島
- 天賣島
- 利尻島
- 禮文島

- 本州島(一九五三)
- 太平洋諸島
- 豆南諸島
- 神子元島
- 津島
- 三宅島
- 御倉島
- 八丈島(二〇)
- 青ヶ島

- 小笠原群島
- 父島(一五)
- 兄島
- 弟島
- 母島
- 向島
- 平島
- 硫黃諸島
- 硫黃島
- 北硫黃島
- 志摩諸島
- 若志島
- 野島
- 大島(紀伊)
- 瀬戸内諸島

- 淡路島(三八)
- 家島
- 西島
- 向島
- 因島(一〇)
- 住口島
- 大崎
- 上島(一二)
- 大崎下島
- 瀨戶島上
- 瀨戶島下
- 倉橋島(二五)
- 江田島

帝國大地誌

能美島(一五) 殿島 大島(三〇) 平群島 屋島 上ノ関島
日本海諸島

鹿島 青海島 見島 隠岐諸嶋 島前 (知夫里島 中ノ島(一六) 西ノ島(三〇)) 島後(三〇)
能登島(一五) 佐渡島(五三) 粟生島

四國島(四五)

大毛山 小豆島(三〇) 豐島 直島 鹽飽諸島 可削島 大島(一一) 伯方島(一〇) 大三島(一五) 志那島 興居島 日振島

九州島(八六一)

櫻島(一〇) 種ヶ島(三七) 屋久島(一六) 河邊諸島 甌列島 上野島(一七) 中 天草諸島 大矢野島(一五) 上島(三七) 五島列島 宇久島 中通り島(六二) 奈留 彼杵諸島 平戸島 (四三) 壹岐島(三五) 對馬島(上ノ島(五〇) 下ノ島(三五))

南西諸島

土噶喇群島 奄美群島 大島(五九) 喜界 沖繩群島 (沖繩島(七四) 浦添島(二〇))

久米 先島列島 宮古列島 八重山列島

臺灣島(三〇〇)

火燒島 紅頭嶼 小琉球島 澎湖群島 澎湖島 白沙島

●半島

半島は海中に突出せる陸地にして一部分を除く外殆ど全部が海水の爲に圍繞せらるるものなり而して我が國は島嶼より成るを以て巨大なる半島の存せざるは敢て恠むに越らず今左に四大島に屬する重なる半島を掲載すべし

十州島 知床半島 花咲半島 渡島半島

本州島 斗南半島 房總半嶋 伊豆半島 渥美半島 知多半島 志摩半島 兒島半島 能登半島 男鹿半島 津輕半島

四國島 道後半島

九州島 國東半島 大隅半島 南薩半島 嶋原半島 彼杵半島

帝國大地誌

地峽

地角

臺灣島 恒春半島

●地峽

地○峽は海と海との間に夾まる、陸地の一部にして其の幅の至りて狭きものなり而して我が國には九州島に於ける彼杵半島の諫早地○峽の外別に舉ぐべき程のものなし

●地角

地○角即ち岬崎とは狭小なる陸地の海中に突出するを云ひて航行上に於ては重要な價值を有するものなり故に燈臺の建設せらるゝ多くは地角に於てすと云ふ

我が國の海岸は甚だ彎曲に富むを以て岬崎の如きは其の數至りて多しざれば今茲には重要なりと認むるもののみを掲げたり

十州島

- 宗谷岬 知床岬 納沙適岬 襟裳岬 蕨山岬 鹽首岬 矢越岬 白神岬 辨慶岬 神威岬 積丹岬 高島岬

本州島

- 大間崎 尻屋崎 大吠崎 野島崎 觀音崎 石廊崎 御前崎 潮ノ崎 珠洲崎 入道崎 龍飛崎

四國島

- 瀨田岬 室戸崎 蹉跎崎 佐田崎 觀音崎

九州島

- 鶴望崎 都井崎 佐多崎 開聞崎 野母崎 速瀬崎

臺灣島

- 富基岬 三貂角 南岬 南西岬

●海岸線

海岸線とは陸地と海水との相接する境界にして屈折の一定せざる曲線を云ふなり而して此の海岸線の發達せると否ざるとは國土の隆盛に赴くと否ざるとに關すること甚しとせず何となれば海岸線の發達充分にして港灣に富饒なるときは航通の便と國防の利とを得るが故に其の開明に向ふも容易にして國威を發揚維持するも困難なるべしされば地理を研究するものは宜しく海岸線に關する模様を詳にし其の延長及彎曲の有様并に港灣の狀態に就きて注意する所なかるべからず

帝國大地理

Handwritten signature 'Nutz'

海岸線

我が帝國は島嶼國にして四圍悉く海水に包まるとが故に其の海岸線も從て長く其の延長は凡そ九千裡に達せり、されば我が國に關し地積一百平方裡に付きての海岸線延長の割合を求め之をイギリス、フランス、ドイツの三國のものに對照すれば

日本 三九〇三米突

イギリス 二七七七

フランス 一〇二五

ドイツ 五七一

にして本邦の遙に他國に優れるを觀るべし

斯の如く我が國は其の面積に比較して岸海線の發達充分なれば水運の便と國防の利とは敢て他國に譲らず、然れども是れ唯一概説にして、若し其の各部に就きて細に觀察すれば至る處、其の屈折の狀態を異にせり、十州島と本州島とを比較せよ、又太平洋に面する地方と日本海に瀕する地方とを對照せよ、如何に其の狀態の異なるかを知るべし

十州島の海岸

十州島にありては北海に瀕する地方の海岸線は殆ど一直線にして屈曲なし、從て良港に乏しく僅に不完全なる網走港あるに過ぎず、此より東の方根室海峡を経て太平洋に出づれば多少の屈曲を觀るべしと雖も、是れ亦根室港、厚岸灣、噴火灣の如き二三の港灣を有するのみ、又此より津輕海峡に入れば函館港の如き良港あれども、西の方、日本海に面する地方を見れば屈曲の多からざるを知るべし、要するに十州島は面積に於ては九州、四國の二島に勝れりと雖も、其の海岸に於ては屈曲に富まず、良港に乏しきとの評言を免るゝこと能はず

本州島の海岸

本州島に於て先づ太平洋に面する部分を見るに其の北部と南部とは頗る其の狀態を異にせり、東北の地方は其の海岸線、屈曲出入して鋸齒狀を呈すと雖も、概して小灣に止まり、其の北東端、尻屋崎より犬吠岬に至るまでの間に稍、大なるものは牡鹿灣と松島灣とあるのみ、然れども犬吠岬を過ぎて南航すれば港灣頗る多く、其の主なるものを擧ぐるも直に十指を屈するに至るべし、東京灣は數港を抱きて相模灣と相隣り、僅に伊豆半島を越れば

Not quite good.

風景絶佳の駿河灣あり、遠州灘を過ぎて伊勢海に入れば知多、渥美の二灣を
 観るべし、再々太平洋に出で、紀州沖を走り由良海峽を経て大坂灣に入り
 其れより瀬戸内海を航すれば海岸の屈曲は無数の島嶼と犬牙交錯して實
 に名狀すべからず、されど一たび馬關を過ぎて北東に向ひ日本海に瀕する
 海岸を検するに太平洋に面する地方とはことかはり若狭、七尾、富山等の二
 三の彎曲を除くの外概ね一直線にして良港なく、船舶は冬季の波濤を避く
 るに由なしと、豈此の地方の不幸と云はざるを得んや

四國島の海岸

四國島は他の四大島に比すれば小なるが故に海岸線の延長も從ひて長
 からず、然れども尙ほ多少の屈曲ありて殊に豊豫海峽に面する地方は最
 著しく之に次ぐは瀬戸内海に瀕する海岸なり

九州島の海岸

九州島に於ては瀬戸内海並に太平洋に瀕する海岸に多少の出入を呈す
 れども又殆ど一直線に見ゆる所あり、然れども佐多岬を過ぎて西海に至れ
 ば鹿兒島灣を始めとし其の灣港の夥しきこと實に他島の及ぶ所に非ず、天
 草灣、千々岩灣、島原灣、有明灣は鯛の浦と共に高來、彼岸の二半島を包み其の

臺灣島の海岸

他の小灣は天草諸島を圍繞して海内第一の天然良港なりと稱せらるゝ、長
 崎港は實に此の地方の海岸に屬せり、其より平戸海峽を経て北の方に進み
 行けば伊萬里港あり、唐津港あり、又福岡灣ありて屈折彎曲に乏しからざる
 を觀るべし

臺灣島は廣袤の稍大なるに拘らず、海岸線六百哩は其の發達充分ならず
 して彎曲屈折には至りて乏しきが如し、其の北岸は延長僅に三十哩に過ぎ
 されども此の島唯一の良港と知らるゝ基隆港あり、其の東岸は斷崖絶崖に
 富むを以て蘇澳灣、花蓮港等の如き小港の存するのみ、其の南岸は短小
 にして一の南灣を抱くあり、其の西岸は延長稍著しきも屈曲少なく水底淺
 くして打狗、淡水の如き二三の小港を有するに過ぎず

●海流

海水は空氣の動搖するが爲に波濤を起し又引力の作用に由りて滿潮と
 干汐とを生ずるの理由は暫く措きて問はざるも事實の存するは通常人の

知る所なり、然れども海流と稱する運動に至りては航業若しくは漁業に従事する者の外は概して之を認めざるべし、然るに海流は外觀の顯著ならざるに拘らず、吾人の生活に重大なる關係を有し、殊に氣候、航業、漁業等に影響すること甚だ大なりとす、是れ我が國の近海に於ける海流の大要を了知せざるべからざる所以なり

海流は海洋の表面の或部に於て附近の海水の靜止せるに比し顯然たる運動を爲し殆ど一定せる方向に進行する流水にして靜穩海水を河床とする運動海水の河流に外ならず、斯る河流の起る原因は素より一ならずして極めて錯綜せり、風力あり蒸發あり海水の比重に基づくあり、氣壓の強弱に依るあり、要するに温度の分布が地球の表面上各處同一ならざるに因れり而して其の方向流勢の如きは前記の諸因の外、尙ほ地球の自轉、海陸の關係等に依るもの多し、且又流水の温度が空氣の平均温度に比して高きか低きかに従ひて暖流と寒流との別を爲せり

我が國の近海に於ける海流には、南より來るものあり又北より來るもの

海流

あり而して此等の海流の方向、速度、廣狹、深淺、温度等は或は季節に依り或は陸地に接近するに従ひて多少の變更あり、由て茲に記する所は眞の概略に過ぎざるものと知るべし

黒潮

黒潮は赤道流と名づくる暖流の餘派にして南の方、臺灣島の近海より來り、九州島の西南に達するや、分れて二派と成る、其の本派は北東に向ひて進行し九州島の南東岸、四國島の南岸并に本州島中部の南岸を洗ひ、御倉島と八丈島との間に於て黒瀬川を爲し、野島崎近傍に於て方向を北に轉し、金花山に到れば再び方向を北東に轉じて、漸々海岸を離れ太平洋中に赴きて、アレット海流となる而して他の一派は九州島の西岸を洗ひ、對馬島を繞り、岐れて二派となりて日本海に入る、其の朝鮮海峽よりするものは朝鮮國の東岸に沿ひて流れシベリア沿岸の海中に消滅す、其の對馬海峽よりするものは本州島、十州島の沿岸を進行し、宗谷海峽を経てオホーツク海に入り、千島列島の西岸に沿ひて北上するものの如し

千島海流

寒流に二あり、其の一は千島海流、又は親潮と云ひて北東の方ベリオン海

樺太海流

峽より來り、千島列島、十州島の東岸を洗ひ、噴火灣近傍に到れば方向を變じて南進し、金花山附近に於て南より來れる黒潮に衝突するや全く其の跡を失ふ。蓋し輕浮なる暖流の下を潜行するならん、其の二はオホーック海の北部より發する樺太海流にして、其の樺太島に衝突するや二派に岐る。東派は同島の東岸に沿ひて流れ、其の末の一部は宗谷海峽に赴き、他の部は國後島、擇捉島の方に向ふが如し。西派は樺太海峽を経て日本海に入り、其の中央を貫流して朝鮮海峽の近傍に達せり。

海流の速度

海流の速度に就きて一言せんに、黒潮本流の速度は南部に速にして北部に遅く、又海岸に接近するに従ひて減少し、北緯四十度以下、五十哩以内に於ては一日に十五哩乃至二十哩なり、而して黒潮支流の速度は本流に比すれば稍微弱にして二哩乃至七哩に過ぎざるが如し。又親潮の速度は南下するに海岸に接近するに従ひて減少し、北緯五十度以下、五十哩以内にありては五哩乃至十五哩に達し、四十度近傍に到れば五哩乃至十一哩に減少す、而して樺太海流の速度は甚だ著しからず。

海流の温度

終りに海流の温度に就きて一言せんに、黒潮の温度は最高二十八九度に於て最低七度なるも、附近の海水の温度に比すれば多少の高度にあり、而して支流の温度は概して本流の温度より二三度低し、又寒流の温度は黒潮の水温より低きこと五度乃至八度にして、近傍の氣温に比すれば低きこと六度に及ぶと云ふ。

●地質構造

本土
北
南

我が帝國の陸地はアヲア洲の沿岸嶋嶼の一部に當り、臺灣嶋及び琉球、本土、千嶋の三嶋等より成りて、南西より北東に連亘せり。本土、即ち十州島、本州島、四國島、九州島、其の他の島嶼を包括せる本土群島は、三嶋中の最も宏大なるものにして、二つの隆起帶より成れり。其の北北東の方、宗谷岬より來り、十州島を貫き、本州島の中部に達するを北嶋と云ひ、其の南西の方より來り、九州、四國の二島并に本州の西部を貫き、其の中部に越くを南嶋と云ふ。此の南北二嶋の接合對曲する處に於て現出したる高峻の隆起を富士帶とす。

千島嶽
琉球嶽

南の方、マリアナ群島より起り硫黄列島、小笠原群島、豆南諸島を經、本州島を横斷して北の方、日本海沿岸の地に達せり。千島嶽は北東の方、カムチャツカ半島の南端より來りて十州島の千島帯に於て北嶽に結合し、琉球嶽は南西の方、澎湖群島より起り臺灣嶽の北部を經て九州島に來り霧島帯に於て南嶽に連續せり而して臺灣嶽は南の方ヒリッピン群島に連接する隆起帯に屬し其の北部は琉球嶽と交叉せり

外面、内面

又地質構造より觀るときは本土嶽の太平洋に瀕する南東面の地體にありては、最古より最新までの水成岩層は、規律正しき褶波を爲し又噴出岩に乏しき特性を有するなり、之を外。面。又は表。面。と爲すべく、日本海に對する北西面の地體に於ては、新舊の地層は交錯綜して火山多く噴出岩に富めり、之を内。面。又は裏。面。と爲すべし而して此の表面と裏面との分界接合に當れる縦斷線は中央線と稱し、火山の多くは此の線に沿ひて迸出せるが如し

岩石

因に記す、地球の皮殻を構造する物質は、堅石硬岩より粘土砂礫に至るまで、之を總稱して岩石と云ひ其の水力に依りて成れるものを水成岩とし、其

水成岩、火成岩

の火力に依りて迸出せるを火成岩とす、而して地層は其の生成の時代に從ひて始原、太古、中古、近古に區別せり、又此等の地層の中には迸出隆起して山骨を爲すあり、或は山腹に露出して斜降するあり、或は沖積層として平地を構成するあり、且又地味の良否は地層が含有せる物質に基づくものにして、岩石の分解混合宜しきを得れば肥沃の地をなし、砂礫粘土の多さに過ぐるは礫角の土なるべし

我が群島も古來より今日の情態を呈せしに非ず、初紀にありては點々たる島嶼の散布せしに過ぎざりしが、第二紀第三紀を經て漸く發達し、遂に當紀に至れるなり、而して本邦の地史を詳述するは稍、高尙に過ぐるを以て今暫く之を略省することとせり、されば我が國の陸地の發達を知らんと欲せば本邦の地質圖に就きて其の梗概を了知すべし

●山誌

山岳、丘陵

山岳とは陸地の著しく隆起せる部分を云ふなり、而して地理學上に於て

帝國大地誌

は陸地の隆起を海面に比較し以て其の高低を定むるものとす、されば山岳と稱すべきものは陸地の平均の高。即ち海面上直立二千五百尺以上に達する隆起たらざるべからず、此の高に達せざる隆起は丘陵と云ふて可なり、然れども土地の情況に依りて此の標準に據らざることあり、山岳に富饒なる土地に於ては三千尺以上に達する隆起も山岳と稱せらるゝの榮を得ず、又平坦なる低地の中にある隆起は僅に一千尺に及ぶも大山、高峯の觀あるを以て山岳の名を附する例も尠からず

山脈、山麓、山系

衆嶺の相連續して蜿蜒たるものを山脈と云ひ、群峯の累々として彙集するものを山彙と云ひ、又並行する數派の山脈若しくは同質の山岳の彙集して規模壯大なる隆起の一帶を爲すことあり、名づけて山系と云ふ

地球の表面に於て山岳、島嶼等の如き凹凸起伏を出現せしめたる所以のものは實に二大原因ありて存す、其の一は地熱の冷却するに當りて地皮の凝縮したること、其の二は地中に潜伏する火力の激烈なる作用なり、而して第一因より生出せし山岳は所謂古世紀山岳にして、第二因より生出したる

山岳は火山質山岳なり

火山とは地熱の激烈なる作用に依りて噴火口と稱する口穴より水蒸氣、浮石若しくは溶解せる岩石等を噴出する山岳を云ふなり、而して火山を三種に區別す、活火山、休眠火山、死火山なり、活火山は常に硫烟、水蒸氣等を噴出し、又熱度猛烈なるときは浮石、土灰、溶解岩等を噴出する火山なり、休眠火山は噴出作用の斷續常なきものを云ひ、熄火山は噴出の根跡あるも其の活動の事實の口碑若しくは史上に傳らざるものを云ふ

我が日本群島を組成する所の主要なる隆起帯は之を二ツの古世紀山系と三ツの火山質山脈とに區別するを得、而して此の二ツの古世紀山系は規模廣大にして實に我が四大島の幹部を爲す、其の一を名づけて北彎山系と云ひ、其の二を南彎山系と云ふ、又た三ツの火山質山脈は富士裂帶、千島裂帶、孫島裂帶なりとす、而して臺灣島の山岳に就きては未だ詳ならざる所あれども、古世紀山系は南北に亘り、火山質山脈は斜に北西端を通過するが如し、北彎山系は一名を樺太山系と稱する地脈にして、本土列島の北部を組成

北彎山系

帝國大地誌

す、其の起點はロシヤの樺太島にあり、此の地脈の我が十州島に渡る、北の方宗谷岬より南走して同島を貫き、北東山脈、日高山脈を爲し、南の方襟裳岬に至りて海中に没す、而して其の一支脈は北東山脈より岐れて別に増毛山脈と稱する一々の小隆起帯を爲せり、又此の山系に屬する一派は本州島に入りて北上山脈と成り、松島灣近傍に於て暫く海中に潜み、再び露れて阿武隈山脈を爲す、而して足尾山脈、關東山脈、並に房總山脈の如きも、此の山系に屬せり。

南嶺山系

南嶺山系は一名を支那山系と云ふ、蓋し此の隆起帯はアシア大陸の支那山脈の餘派に外ならざればなり、而して此の山系の外帶山脈は九州島の南部を横斷し、四國島の幹部を爲し、本州島に入りては重厚なる紀伊山系と成り、赤石山脈を以て本州の中部に達せり、又其の内帶山脈は九州島の北部より本州島に渡り、中國山系を爲し、琵琶湖の北岸を過ぎり、木曾山脈に依りて本州島の中央に連續せり。

此の南北の二大山系が互に相對曲連接する處、即ち二つの地脈の縫裂線

富士火山脈

千島火山脈

に當る處に於て地熱は劇烈なる噴火作用を逞しうして、海内第一の高山たる富士山を始め、とし其の他の秀嶺高峯を迸出せしめたり、而して此の火山脈は伊豆半島を経て太平洋中に入り、豆南諸島、小笠原群島、硫黃列島を噴起して、遠く南洋のマリアナ群島に達せり、此の宏大なる火山脈を稱して富士裂帶火山脈と云ふなり。

千島火山脈はロシヤのカムチアカより起りて、南西の方に進みて、千島列島を噴起し、十州島に入りては、東端知床岬より、良牛岳、斜里岳、雌雄の阿寒山、スタップカウシツベ(石狩岳)、オプタシケ等を経て、同島の中央に達せり。

霧島火山脈

霧島火山脈は南の方、臺灣島より來りて、琉球群島、土噶喇群島、奄美群島を噴起し、開聞岳、櫻岳を経て、霧島山に到り、少しく方向を北西の方に轉じて、金山、温泉岳を経て、多良岳に至りて止む。

前記の山脈の外に尙ほ顯著なるものあり、今左に之を列記せんとす。先づ北嶺に屬する山脈に就きて云はん、多くは火山質にして、又秀岳高嶺に乏しからず、其の十州島にあるものを後志山、筑波山、島山脈、千軒山脈とす。

帝國大地誌

後志山脈

中央火山脈

殊に後志山彙は同島西部の最、顯著なる隆起帯にして活火山に富り、本州島に於ては三脈あり其の一は規模最、宏大なる山脈にして北の方、斗南半島の恐山近傍より起り、南進して本島の中部、富士裂帯に達せり、此の火山脈は實に陸奥山脈、那須山脈、帝釋山脈、日光山脈、上信山脈より成りて、直立二千メートル以上の秀嶺若しくは活氣の盛なる火山を包括せり、自餘の二火山脈は連続せる山脈を構成せざるも其の羽越山脈は鳥海山、飯豊山等の如き高山を抱括す、然れども、彌彦山脈は著しき隆起を爲さず粟生島、飛島を噴起して男鹿半島に至れり

阿蘇火山脈

次に南響に屬する三つの火山脈を記さんに、其の重要なるものを阿蘇火山脈となす、此の火山脈は九州島の中央に於て蟠廻せる山彙を爲し、四國島に渡りては道後半島の南に於て稍、著しき隆起を呈するも同島の北東部を経て本州島に入るや其の踪跡顯明ならず、中部に至りて再び露出するも直に消滅せり、自餘の二つの火山脈は北響に於ける羽越彌彦の両山脈と同様に、連続せる山脈を爲さず、其の一は白山火山脈と稱するが三瓶山、大山等

飛騨山脈

を噴出し白山に至りて止み、其の二は高洲火山脈にして五島の笹山、壹岐島見島、隱岐群島を噴出し能登半島の北端を経て佐渡島の金北山に終るものなり

臺灣山脈

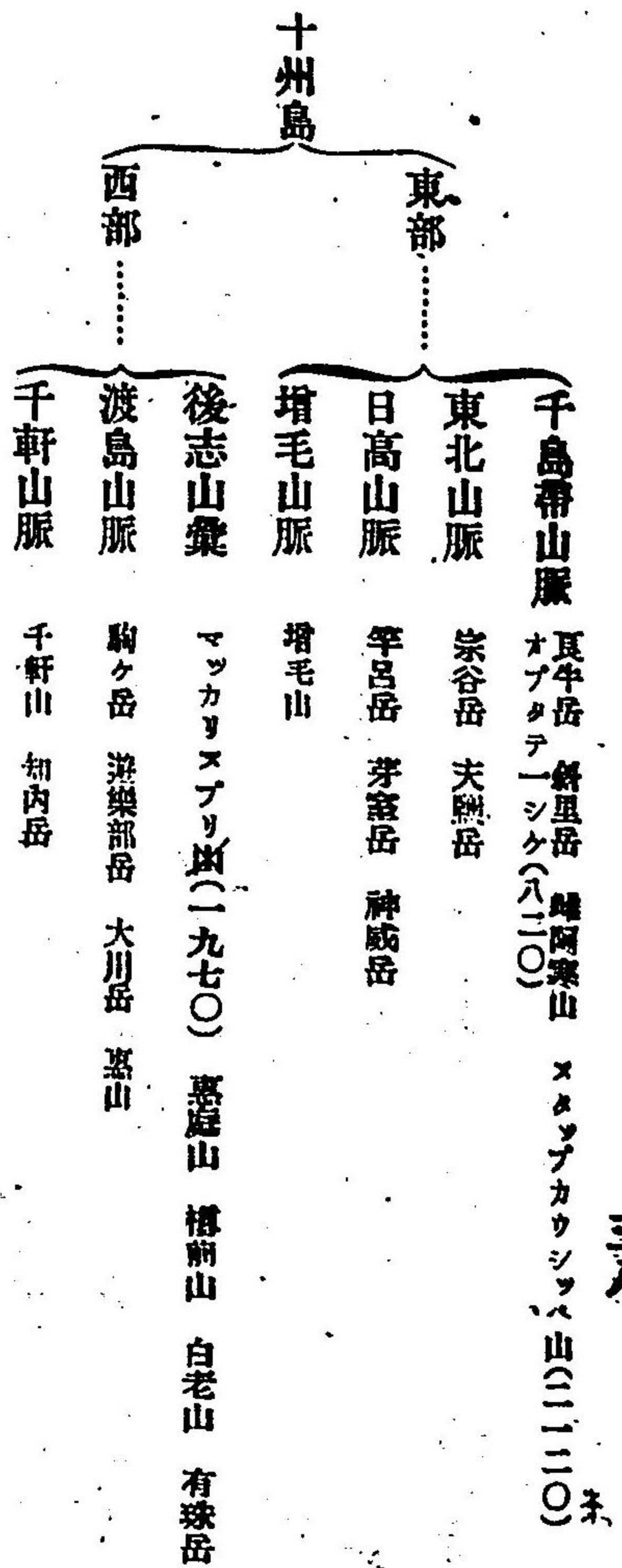
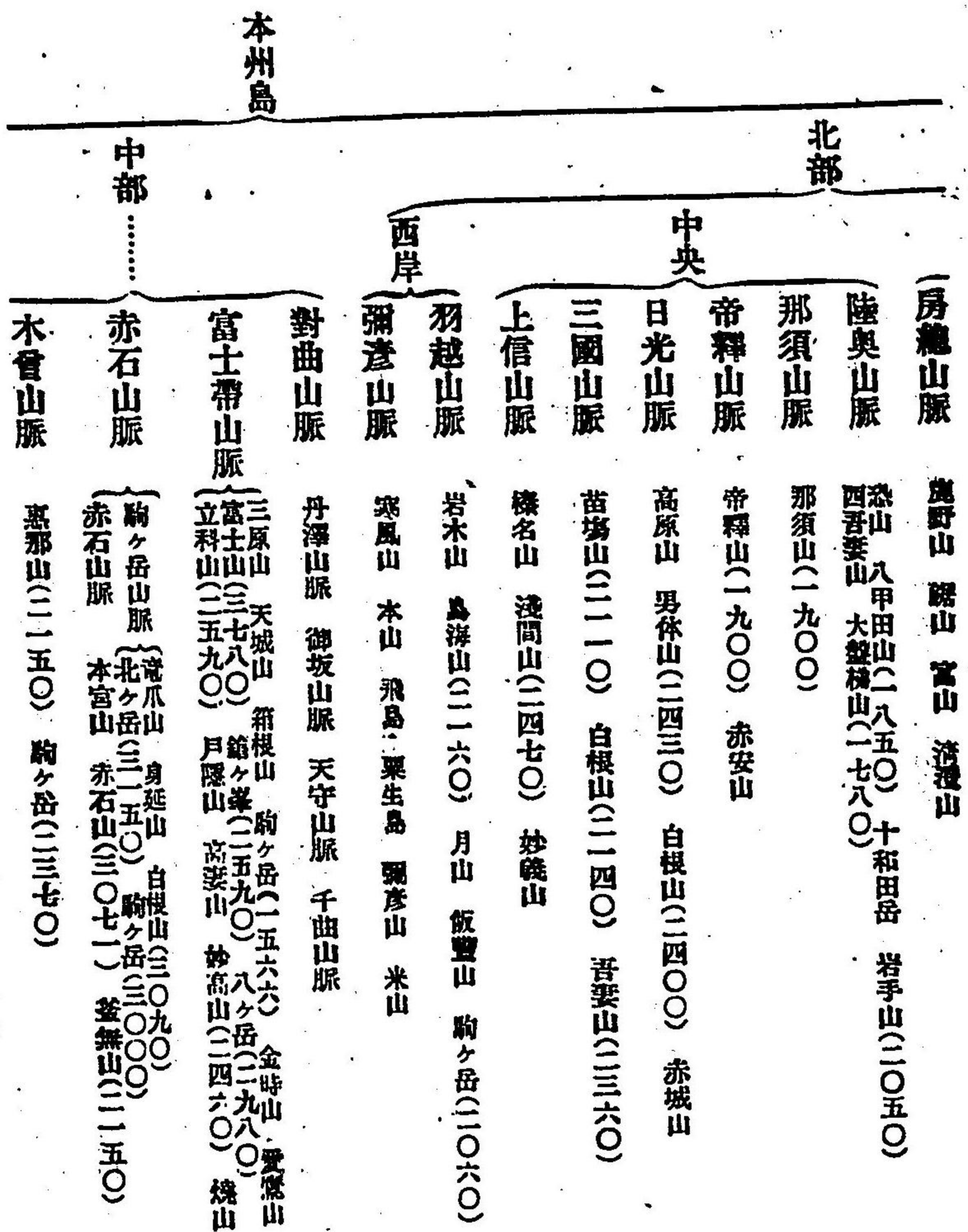
又本州島の中部に於て殆ど南北の方向に連亘せる一大山脈あり、名づけて飛騨山脈と云ふ、其の雄壯宏大なる我が國第一の連山なり、御岳、乗鞍岳、鈴ヶ岳、立山等の如き直立三千メートル前後の高山の多くは此の山脈中に包括せらる

臺灣嶋にありては主幹山脈は新高山一に玉山と云ひ又モリソン山と云ふ雪山等の如き高嶺秀峯に富めるが稍、東に偏在し基隆の近傍より起りて南の方、恒春附近に達せり而して火山質の山岳は該島の北西部及び澎湖嶋にあり
我が群島中にある山脈の名稱并に其所屬の高山を左の表中に列記したれば地圖と對照して山脈の趨勢、高山の分布等を了知すべし但し、山岳の名稱の下に數字を記入せるは直立のメートル數なりとす

千島列島

千島群山脈 ナルップ山 ヒトカッブ山 チヤチヤ岳

帝國大地誌



西部

- 飛驒山脈 御岳(二九八〇) 栗嶽(三一七〇) 鹿岳(二八四〇) 槍ヶ岳(三〇九〇) 大嶽花岳(三〇四〇) 立山(二八五〇)
- 高洲山脈 五島 壹岐島 見島 隱岐島 法立山 高洲山 金北山
- 白山山脈 青野山 三瓶山 大山(二七八〇) 白山(二六九〇)
- 鈴鹿山脈 鈴鹿山 養老山 噓吹山
- 紀伊山系 高野山 玉置山 天井山(二八八〇) 大嶽原山(二六四〇)
- 中國山系 嵯峨山 愛宕山 比叡山 比良峯
- 四國山系 笹ヶ峯 雪光山 剣山(二二四〇)
- 讃岐山脈 別子山 雪後寺山
- 阿蘇山脈 高繩山 石鎚山(二三六〇)
- 阿蘇山脈 金嶽山 阿蘇山(二五八〇) 根子岳 扇ヶ岳(二七二〇)
- 北部山脈 肥後山脈 筑豊山脈
- 南部山脈 市房山(二八二〇) 祖母ヶ岳(二七二〇)
- 對曲山脈 小松山脈 大隅山脈
- 霧島帶山脈 開聞岳 櫻島 西霧島山(二六六八) 東霧島山(二八六六)

四國島

九州島

西南諸島

臺灣島

我が日本群島は世界屈指の火山國にして火山の数は實に百七十餘座に達すと云ふ而して之を四大島及び其の屬島に依りて區分すれば

- 霧島帶山脈 中ノ島 諏訪ノ瀨島 墨石島
- 主幹山脈 雪山(三四〇〇) 新高山(三八六〇)
- 臺灣火山脈 大屯山(一〇五〇) 三貂山(八五〇)
- 十州島及び屬島 四十六座
- 本州島及び屬島 九十七座
- 四國島及び屬島 三座
- 九州島及び屬島 二十六座
- 臺灣島及び屬島 數座
- 又活火山及び休火山の中にて主なるものを列擧すれば
- 十州島 良牛山 硫黄岳 雌阿寒山 樽前山(活) 駒ヶ岳
- 本州島及び屬島 恐山 岩木山 西吾妻山 磐梯山 那須山(活) 淺間山(活) 三原山(活) 富士山 焼山

九州島及[○]屬島 由布岳 温泉岳 阿蘇山(活) 霧島山(活) 櫻島

臺灣島 大屯山

温泉

温泉とは平均気温以上の温度を有する鑛水を湧出する泉を云ふなり而して其の高温にある原因は直接なると間接なるとに拘らず地熱の作用に基づかずんばあらずされば温泉は火山脈が通過せる地方に點在するを常とす然るに我が群島は數條の大火山脈が縦横に通過せる地なれば温泉の存在する箇所も從ひて夥しく其の數は五百に及ぶと云ふ而して斯る泉より湧出せる温湯が含有せる主要の物體の如何に依りて、炭酸泉、硫黄泉、鐵泉、鹽類泉、食鹽泉等の五種に類別するものなるが本邦に於て最も多きは硫黄泉にして之に次ぐを鹽類泉とす今左に各大島にある温泉にて稍、有名なものを列舉せり

十州島 下湯川 湯有内 定山溪 登別

本州島 草津 熱海 箱根 有馬 修善寺 和倉 鹽原 城ノ崎

四國島 道後

九州島 小濱 阿蘇溪 山鹿 日奈久

臺灣島 北投

●水誌

我が日本國は太平洋中より迸出せる群島にして山岳丘陵に富めると、四圍悉く海なるのみならず南より流る、黒潮の暖流あり北より來る親潮及び樺太海流の二寒流あるを以て氣候濕潤、降雨饒多なり、從ひて水流沼澤夥しうして灌漑の利便を與ふること大なりとす、されば山間に蒼鬱たる樹林多く、平野に豊饒なる耕地少なからず、然れども國土の形勢狹長にして山脈の傾斜急峻なれば顯著なる河系の存するなく又廣大なる沼湖のあるを見ず故に我が國の河流は豁谷の間に狂奔する細流に非ざれば多くは霖雨の際に忽ち膨漲し猛烈なる勢を以て沿岸の疆土に災厄を及ぼす激流なり、彼の航通の便と運輸の利とを供する靜穩にして水量に富める河流に至りては極めて稀なりとす

上流

中流

下流

河口

四四

河川の流域を三分して上流、中流、下流の名を附する所以のものは此の區域の各に特別なる形勢の存するあるに由るなり、夫れ河川の上流に於けるや河床の傾斜甚だしく兩岸高く聳へ河幅廣からず水流の猛烈なる或は瀑布をなし或は激湍をなして狂奔す、其中流にあるや河床の傾斜稍緩慢にして流勢激しからず沿岸の邦土に灌漑の利を興へ或は支流を合はせて水量を増し或は停水して沼湖を爲す、而て河川の下流に達するや河幅は漸く廣く水層は漸く深くして大に通舟の便を興へ、河口に至り或は河灣を爲して海に注ぐあり或は潟と稱するものを爲すあり又數流に分れて三角洲を形成するあり

さて我が國の河川に就きて觀るに多くは上流、中流を有するに止まりて眞の下流を具備せるものは至つて少しとす、中には上流の形勢のみを有するに過ぎざるものなきにしもあらず

夫れ雨水の降りて地上に達するや所謂卑きに就くの理に依りて高處より低處に往く方向に流下し、砂礫の如き地層に逢へば地中に潜みて伏泉

分水嶺

太平洋斜面

北海斜面

を爲し、堅硬緻密の地層に逢へば表面を流れ行きて海に注ぐ、されば我が國の河流は山脈の趨勢に従ひて太平洋、北海、日本海、西海、臺灣海峽、瀬戸内海の六海に注水す、是れ我が邦土を水誌上六つの斜面に區分する所以なり、而して二つの斜面の分界に當る連山高處は分水嶺と稱するものを爲すなり

太平洋斜面は五斜面の中の最廣きものにて其の分水嶺は十州島に於ては知床岬に起る千島帶山脈并に日高山脈の一部を主要なるものとし、石狩、膽振の平原に於ては顯明を失ひ、後志山彙に逢ひて南に偏し、渡島、千軒の二山脈を以て終り、本州島に於ては中央山脈、信飛山脈、濃越山脈、鈴鹿山脈を経て紀伊高原に終る、四國山系は四國島を太平洋瀨戸内海の二つの斜面に分ち、九州島に於ては南部山系、大隅山脈は太平洋斜面と西海斜面との分界線を爲し、臺灣嶋にありては南北に亘れる山脈は太平洋斜面と海峽斜面との境界を爲せり

北海斜面の分水界は宗谷岬より起る所の東北山脈と知床岬より來る千島帶山脈との二脈なりとす

日本海斜面

四海斜面

海峽斜面

内海斜面

日本海斜面は太平洋斜面に次ぐの大斜面にして、其の分水線は九州島に於ては肥筑山脈を以てし、本州島に入りては中國山系に依りて内海斜面と界を交へ、中部并に北部は太平洋斜面に接し、十州島に於ては北部の北東山脈に於て北海斜面に接するの外、餘は悉く太平洋斜面に接す。

四海斜面は九州島にありては肥筑山脈を以て日本海斜面に接し、筑豊山脈、阿蘇山、南部山系の東部を以て瀬戸海斜面と界を交へ、霧嶋山脈に依りて太平洋斜面に接し、而して臺灣島にありては僅に北端の海岸に限れり。

海峽斜面は臺灣島の西部より成れるが主幹山脈に依りて太平洋斜面に隣接せり。

第六の斜面は本州、四國、九州の三大島に亘れるも、其の幅員廣大ならずして殆ど四國に陸地を控ゆる内海斜面なり。

此等の六斜面の中にて、太平洋斜面は最廣濶なるを以て之に屬する河川には流勢の稍緩慢なるものありて漕運の便をなすこと少しとせず、日本海斜面は狭長なれども亦長流に乏しからず、然れども自餘の斜面には著しき

河流を見ること罕なり

其一 河川

我が國の河川の中にて稍著しきものを列擧し、之を六大斜面に區分すれば、則ち左の如し、但し表中、川名の下に記せる數は水

太平洋斜面

四脚川(二八) 風連川(二二) 釧路川(三三) 十勝川(五二)

十州島

沙流川(三五)

馬淵川(二五) 北上川(七九) 鳴瀬川(二五) 阿武隈川(七七)

那賀川(四二) 利根川(七一) 荒川(三〇) 多摩川(一八)

本州島

相模川 酒匂川 富士川 大井川(四六) 天龍川(六〇)

豊川 矢作川 木曾川(四六) 鈴鹿川 五十鈴川

宮川(三二) 新宮川(三七)

四國島

物部川(二五) 仁淀川(二六) 渡川(二五)

九州島

五箇瀬川 美々津川(二八) 大丸川(二五) 一ノ瀬川(三〇)
大淀川(二五)

臺灣島

臺東溪 卑南溪

北海斜面

十州嶋 潮走川 常呂川(三五) 湧別川 榎別川(二五)

日本海斜面

十州嶋 天鹽川(七四) オヒラベチ川(二二) 石狩川(九六)
尻別川(三六) 利別川

本州嶋

岩木川(二二) 能代川(二二) 御物川(三五) 最上川(三五)
阿賀川(五七) 信濃川(一〇〇) 常願寺川 神通川(五二)
庄川(五八) 大聖寺川 九頭龍川(三二) 由良川(三〇)
江ノ川(五〇)

九州嶋

遠賀川

西海斜面

九州嶋 筑後川(三五) 緑川(二一) 球磨川(二四) 川内川(四六)

海峽斜面

淡水河(三五) 房裡溪 大甲溪(三〇) 大肚溪(二八)
濁水溪(四五) 後埤溪 曾文溪 下淡水溪(三二)

内海斜面

本州島 紀ノ川(四七) 大和川 淀川(二〇) 加古川(二八)
東大川(三一) 西大川(三七) 太田川 錦川(二七)
九州島 大野川(三四)
四國島 吉野川(四一) 那賀川(二八)

前記の河流中の主要なるものに就きて流域の形勢効用の多少等を述べんに

十州島に於ける四大川を釧路川十勝川石狩川天鹽川とす

○釧路川は源を風茶路湖に發し南流して釧路港に至りて海に入る、其の流域多くは高原に屬するを以て水勢緩にして下流凡そ二十里の間小汽船を通ず、支流の主なる

ものを阿寒湖より出づる阿寒川とす
十勝川は十勝岳に發源し高原性の土地を貫流し多くの支流を集めて海に注ぐ、其の長は五十三里に達する一巨流なれども流域の地は未だ拓殖するに至らざれば本川を利用すること甚だ少なし

石狩川

石狩川は十州島中の最長流にして實に九十六里に達す其の源を千島帶山脈中の石狩岳に發し上流は水勢極めて急激なり然れども中流以下五十里は小蒸氣船を通ずるを得石狩近傍に於て日本海に注ぐ、支流は其の數少なからざれども主なるものを擧ぐれば右岸の雨龍川に左岸の空知川、千歳川、豊平川なり、豊平川は札幌岳より發し對雁に於て石狩川に注ぐ、小流なるも札幌市街を過ぎるを流て其の名を知らる

天鹽川は十州島第二の河流にして其の長は七十四里に達せり、水源は天鹽岳より發するも甚だ高からざるを以て水勢緩にして流木の河中に横はるもの少なく舟行に利便あるは石狩川に異なりたる所とす

本州島に屬する河流中の大なるものを列舉せん

北上川

北上川は源を御堂村に發し南流して黒澤尻に至れば漸く大にして舟楫の便あり、水源を距ること七十四里にして小船越に至り分れて二流と成り一は南流して石巻に至りて牡鹿灣に入る、長凡そ四里、瀧三町あり、一は追波川と云ひ北東流して追波津と長面瀆との間に於て太平洋に朝す、長凡そ五里、瀧三町あり、本川の流域は南北に亘れるを以て河床の傾斜急險ならず、從て流勢概ね緩慢にして灌溉の利と漕運の便とを與ふるの點に於ては東北地方第一の良河なるのみならず又本邦有數の佳川なり、支流は左岸にある猿ヶ石川、並に右岸にある雫石川、和賀川、衣川、磐井川、追川、玉造川を以て主なるものとす

阿武隈川

阿武隈川は源を陸奥山脈中の旭岳及び甲子山を發し東流すること凡そ九里にして白河を過ぎ、方向を北に轉じて諸水を容れて漸く巨流と成り、東流又は北流し福島を経て再び東に折れ荒濱に至りて海に注ぐ、本川の長は七十七里にして瀧は十町に達する處あり、沿岸の地を潤はし通船の便を與ふること少なしとせず、又支流中の稍著しきものを須川、松川、摺上川、廣瀬

利根川

利根川は源を文珠山下に發し南流して沼田を過ぎ新町に於て廣瀬川を分派し東流して數派と成り前橋を抱き再び廣瀬川と相合し又は他の諸水を容れて漸く巨流と成る之を上利根川と稱す長二十八里濶五町に達す栗橋に於て再び分れて南北の二道を爲すや南派は權現堂川と云ひ逆川と稱す即ち利根川の本流なり北派は赤堀川と稱す關宿附近に至りて二派の相合するや濶大に増す栗橋以下を總稱して中利根川と云ふ其の長十二里に達せり、蓋養川を合はせたる後は下利根川と稱す其の流域平坦なるが故に水勢極めて緩にして水量甚だ多く沿岸の地方に利便を與ふると實に大なりとす是れ本川を名づけて坂東太郎と稱するに至れる所以ならんか本流の河口は銚子にあり其の濶は二十五町餘にして長は源委通じて七十餘里に達せり中利根の一派は江戸川と云ひて東京灣に注ぐ支流は左岸より注ぐものを片品川渡良瀬川鬼怒川蓋養川とし右岸より來たるものを吾妻川神流川とす。

荒川

荒川は源を木賊谷其の澤に發し東流して大宮を過ぎ北流して熊ヶ谷の南を過ぎ東京に近づきて暫く戸田川と稱す其の東京に入るや南流して隅田川と稱し市街を二分して東京灣に入る本川は源委通じて三十里の長を有す而して河幅は中流に於ては十二町に達すれども水量多からず下流に於ては水底淺からずして流勢も亦緩なり漕運の便を與ふること頗る多し支流は入間川を以て最とす

富士川は笛吹川蓋無川鹽川の三水の相合したる後の名なり南流して芝川を容れ蒲原縣の東に於て海に入る本川の長は十八里に過ぎざれども笛吹川を上流とすれば長は三十八里と成る河底の傾斜甚しく流勢極めて急險なり實に本邦三大激流の一たり

大井川には二源あり共に白峯に發して西俣川東俣川と云ふ其の合して大井川と成りたる後湖水溪流を集め南流して川尻飯淵兩村の間に至りて海に入る長は凡そ四十六里にして濶は十八町に達する處あれども常時は水量少なし然れども豪雨霖雨に際すれば河流膨脹して沿岸の地に損害を與ふること少なからず

天龍川は源を諏訪湖に發し、氣田川、阿多古川を合はせ掛塚村に於て海に注ぐ、長六
十里、幅八町餘の大河なれども、常時に於ては水量多からざれば舟楫の便を興ふるこ
と甚だ多からず

木曾川

木曾川は源を荻曾に發し、南西に流れて福島を過ぎ、南流して衆水を合はせ
漸く巨川と成る、十町野に於て佐屋川を派し、本流も亦數派に分れて海に朝
す、長は四十六里ありて河口は十二町に達せり、本川は沿岸の地を潤はすの
利あれども亦水害を蒙らしむること稀なりとせず、支流は左岸に五條川を
受け、右岸に王瀧川、飛驒川、長良川、榊川を受く

紀伊の川は源を大壑原山に發し、吉野川と云ひ、紀伊の川と稱す、根來川、野上川は其
主なる支流なり、本川の長は四十七里にして、瀨は八町餘あり、下流は舟楫を通するこ
と十三里に達せり

淀川

淀川は琵琶湖より發し、南流して勢多川と云ひ、西流して宇治川と成り、伏
見を過ぎ、淀に於て桂川を合はせ、始めて淀川と稱す、神崎川、中津川を分派し、大
坂市中に入りては南北二流に分れ、南は土佐堀と云ひ、北は堂島川と云ふ、共

に西流し中の島を漕りて相會し、江の子島に至りて再び二派に分れ、安治川
木津川と成りて大坂灣に入る、本流は源委通じて凡そ二十里なり、其の瀾
は七八町に達する處あり、支流の主なるものは桂川、木津川なり、桂川は源
を桑田の山谷に發し、上流を保津川、大堰川と云ひ、清瀧川、加茂川を合はせて
宇治川に會す、其の長は五十里に達すと云ふ、加茂川は五里未滿の一小流な
れども京都を過ぐるを以て世に名あり

西大川は一名を旭川と云ふ、二源あり、一は龍王池より發し、一は鷺溪に發す、高田川
と稱して東流又は南流して勝山を繞り、南東に流れて西大川と成り、阿山を過ぎ、福島
に於て兒島灣に入る、其の長は三十七里に達し、瀾は三町餘に達すと云ふ

太田川

太田川に二源あり、才原に於て相會し、兩岸より來たる衆水を合はせて、漸
大なり、其の廣島近傍に達するや分れて燕尾狀を爲し、東派は京橋川、猿猴川
と成り、西派は猫屋川、本安川、横川等の數流に分れ、共に南流して廣島灣に注
ぐ、長は二十三里に過ぎずして、流域は宏大ならざるも水量に乏しからず
廣島市が中國の一大都會たるは蓋し本川の賜ものならん

江の川

射水川

神通川

信濃川

江の川は一名を石見川と云ふ源を丸瀬山に發し上流を三次川と稱す北西に流れ出羽川を容れ北流して熊見川を合はせ南西流して矢上川を受け再び北西に流れて渡津に於て日本海に入る長凡五十里にして濶は三町あり舟楫を通ずること二十里に達せり實に山陰地方の大河たり

射水川は一名を莊川と云ふ二源あり一は河戸の山中に發して上白川と稱し一は白山の白水瀧に發して大白川と稱す平瀬に於て相合し北流して射水川と成り新港に至りて日本海に注ぐ長は五十八里にして濶は五町に達すと云ふ支流の小矢部川は大門山に發し米島に於て本川に入る

神通川は源を川上岳に發し上流を宮川と稱す山澗谿流を合はせ北流して神通川と成り富山を経て東岩瀬に於て海に入る長は五十里ありて濶は四町餘に及ぶ支流は高原川を以て最とす

信濃川は上流を千曲川と云ふ源を金峯山に發し北流して犀川を容れ川中島を擁し信濃川と成り西川中の口川を分派し三條町を過ぎ再び中の口川西川に會し新潟の東に於て海に注ぐ其の長は百里に達し最濶き處

河賀の川

最上川

は八町に達すと云ふ實に本邦第一の長流たり然れども河床に泥沙多く水量充分ならざるが故に漕運上多少の便益を興ふるに拘らず効用の點に於ては我が國諸川の首位を占むるを得ざるは本川の爲に惜む所なり支流の主なるものは左岸の犀川と右岸の魚沼川なりとす其の他に尙數多の合流あり是れ信濃川を稱して八千八百水河と稱する所以なり

阿賀の川は猪苗代湖に發し上流を日橋川と稱し鶴沼川を受け館原に至り只見川に會し阿賀の川と成り津川を経て澤海に於て小阿賀川を分ちて信濃川に通じ新發田川加治川を合はせ松崎に於て日本海に入る長五十七里濶三町餘あり流勢急なれども津川以下十八里の間舟楫を通ずるの便あり

最上川は上流を松川と云ふ源を大日岳に發し北流して羽黒川鬼面川等の數流を受け杉山に至りて始めて最上川と稱す小鹽に於て新川を分派し酢川寒河江川等を合はせて西流し新庄の南を過ぎ酒田港に於て海に注ぐ長凡六十二里濶十三町余に達せり下流は漕運上多少の便益あれども

上流に於ては河床峻険にして水勢極めて猛烈なり、實に本川は我が國三激流の一たり

吉野川

四國島は四大島の一なるも其の廣袤大ならざるのみならず高原性の土地なれば河川の中にて流域の稍廣きは唯一の吉野川あるのみ

吉野川は源を龜ヶ森山の南麓に發し本川と稱して南東に流れ諸水を合はせて吉野川と成り第十村に於て別宮川を分派し北川と成り高房に於て南川を分ち中喜來浦に於て撫養川を分派し廣戸川と成り東流して豊久に至り海に入る長四十三里濶四町に達せり本川は世に四國三郎と稱するも

筑後川

九州島は山岳急峻にして河流の多くは激湍に非ざれば細流なりされば筑紫の三大川と稱する筑後川球摩川川内川の如きも流域は甚廣からず筑後川は千年川三隈川境川等の名あり其の水源一は阿蘇山脈の小國山

に發し一は九重山より出づ上流を上座川と稱す諸水を集めて筑後川と成り又甘木川正原川を合はせ大野島の東西を繞りて海に入る源委通じて凡そ三十五里濶五町餘なり流域大ならずと雖も又水量少なからず沿岸の地を利すること多きに因るか世に本川を稱して筑紫次郎と云ふ

球摩川に二源あり一は五箇莊樵木に發して樵木川と云ひ西流して樵の積川と成る一は片尾山より出でて南西に流れ柳瀬に於て樵の積川に合し球摩川と稱す人言の北を繞り北又は西に流れて海に入る長は二十五里に過ぎざれども濶さは八町に達せり舟楫を通ずること六里にして河口に八代港あり本川は流勢烈しきを以て日本三激流の一に數へらる

川内川

川内川に二源あり一は白髯岳より發して山野川と云ひ羽月川と成る一は狗留孫山中に發し南流して眞幸川と云ひ下殿に於て羽月川に會す金山川穴川を受け宮之城の北を過ぎ豊川を合はせ久見崎に於て海に入る長四十六里濶二町あり下流凡そ十六里の間舟楫を通ず

臺灣島は水流に乏しからざるも大河の存するあるなし

淡水河は臺灣島第一の河流なり、水源を主幹山脈の北部に發し、上流を新店河と云ひ北流して低地に出づるや、右岸より頭延溪を受けて西に折れ、再北流して猛艸の西を過ぎ太姑陷河を合はせ、大稻埕に接し基隆河を容れて淡水河と成り、淡水港に依り臺灣海峡に注ぐ、長きは三十五里なるも通舟の便と灌溉の利とを與ふること頗る多しと云ふ

濁水溪は源を雪山の南面に發し南流して山地を離るるや、方向を西に轉じ數多の溪流に分れて海に注ぐ、本溪は四十五里の長きを以て臺灣島の最長流と稱せらるるも、水盡に乏しく河床に沙洲の横はるありて、便利を供すること多からず

下淡水溪は一に南淡水溪と云ふ又阿星溪と云ふ、源を主幹山脈の中部に發し冷水溪、赤山溪等を合はせ東海に至りて海に入る、長きは三十二里なるが灌溉の利を與ふること少からずして臺灣島第二の河流なり

其二 沼湖

我が國の沼湖は前にも述べし如く廣袤の大なるものなし、今左に稍著

しきものを列擧す、但し沼湖の名の下に數字を記せるは周回の里數なりと知るべし

猿湖(二〇) 能取湖 網走湖(一一) 風連湖(一五)

十州島 厚岸沼 摩周湖 屈茶路沼(二三) 阿寒沼 洞爺湖(一〇)

支笏沼(一五)

小河原沼(一四) 十和田湖(一〇) 品井沼 瀧沼 北浦(一五)

蘆浦(三六) 牛久沼 印旛沼(一二) 手賀沼 中禪寺湖

富士八湖 芦ノ湖 山中湖 辨天湖 四尾連湖

浮島沼 諏訪湖 琵琶湖(七四) 穴道湖(二三)

本州島 中海湖(一六) 北湯(五) 河北湯(六) 猪苗代湖(一六)

福島沼 八郎瀨(一五) 十三沼

九州島 鴨生田池 掛宿湖

臺灣島 打狗沼

前記の沼湖の中の主なるものに就きて一言せんに

猿瀨湖

猿瀨湖は十州島の最大湖にして、東西八里、南北三里、周圍二十里に達す、北は一條の沙丘を以て北見海に接し、西岸に草原ありて南岸は山麓に接す、湖水鹽分を含み海魚游泳す、北東に湖口ありて海に通ず

綱走湖は廣袤共に二三里ありて周圍は十一里に達せり、綱走川を受け其の下流一里餘にして海に入る

風連沼は東西三里中、南北一里に過ぎざれども湖岸頗る風曲せるを以て周圍は十五里に達す、根室海峡の沿岸にあり

小河原沼は本州の北部にあり一名を倉沼と云ふ、東西二里半、南北三里半、周圍十四里を有す、七月川を容れ東の方海に通ず

北浦

北浦は本州の東部にあり東西一里、南北六里の狭長なる湖にして周圍十五里に達す、上は霞ヶ浦の餘流を受け、下は浪逆浦に合して利根川に入る、舟楫の便を與ふること少なからず

霞ヶ浦

霞ヶ浦は本州島第二の大湖にして東西七里半、南北七里、周圍三十六里あり、下流は浪逆浦と成り北浦を併はせ利根川に注ぐ、水淺く、岸坦にして魚蝦

を産すること多しとす、又航通の便を與ふること尠少なからず

印旛沼は東西二里、南北七里、周圍十二里あり、下流は利根川に通ず、舟楫の便、魚蝦の利共に少なからず

中禪寺湖

中禪寺湖は周圍五里に過ぎざれども一千四百メートルの高處に位し、男體山は峨々として雲表に聳え、湖邊の丘陵は綠樹蒼鬱たり、山水の明媚なる實に筆紙に盡し難たし、湖水は華嚴の瀧と成りて百餘メートルの斷崖を下りて大谷川と成り、鬼怒川に合して利根川に注ぐ

琵琶湖

琵琶湖は其の形琵琶に似たるを以て名づく、一に淡海と云ひ又は鵜の海と稱す、海拔百メートル、東西五里、南北十五里ありて周圍は六十里、面積は八十一方里に達す、最深の處は七八十メートルあり、實に我が國第一の湖たり、世に稱す八百八水を受けて唯一の勢多川に依りて海に注ぐと、沿岸の地方に灌溉の利と漕運の便とを與ふること大なるのみならず、又漁業の利少しとせず、近年湖上に汽船を浮べ以て交通の便益を増進せり、特に湖岸の風景絶佳にして、近江八景の名、世に高し、湖中に奥島、沖島、多景島、竹生島の如き數

中海

尖道湖

猪苗代湖

嶼あり

中海は古名を意。宇の海と云ふ。周回十六里にして南北五里東西三里半あり。尖道湖及び伯太川、飯梨川、田頼川、意宇川等を容れ、中江の瀬戸を以て日本海に通ず。

尖道湖は往古中海に連接せしを以て又意。宇の海の名あり。東西四里半、南北二里、周回十二里。宇賀川、來待川、玉造川、乃白川等の諸水を容れ、松江の南より馬潟の瀬戸を経て中海に通せり。

猪苗代湖は東西五里、南北三里半、周回凡そ十七里あり。海拔六百メートルの地に位し、四圍に山岳を繞らして鬱蒼たる緑樹は水に影じ、風景極めて佳なり。底深く魚多し。近年は湖上に汽船を浮べて貨物の運輸、旅客の來往に便す。又灌漑の利少からず。下流は日橋川に依りて日本海に注ぐ。湖中に一島あり、翁島と名づく。

●地勢

土地の高低は氣候の適否、地味の肥瘠、灌漑、交通等に關係を有するを以て人生の發達、百業の上進に影響を及ぼすこと至って大なりとす。されば我が邦土に就きて高地と低地との分布並に其の狀況の梗概を了知すべきは今更喋々するを要せざるべし。

地理學上に於ては陸地の高低に依りて山地、高地、低地、窪地の別を爲す。而して此の區別を爲すに就きては大體の標準なきにしもあらず。然れども又一定不易の標準ありと云ふに非ず。邦土の廣狹、地勢の急緩等に依りて多少の變更を來たさざるを得ず。されば本邦の地勢に就きて論ずるに當りては左に記する如き標準に據れり。

海面より直立七百メートル以上に達する土地を山地と云ひ、直立七百メートル以下二百メートル以上の土地を高地とし、二百メートル以下の土地を低地とせり。而して窪地と云ふは海面より低き土地なれども本邦に於ては此の種の陸地は存することなきが如し。

山地は降雨の媒介と成り、烈風の屏障と成り、水源を發し、排水を司る等の

山地

如き間接の効用あるは勿論なれども林業、鑛業の外他に生業に直接の裨益を與ふること少く地味概々稜角なるのみならず交通を遮断して人生の發達に多少の妨害を爲す

低地

低地は平野、平原、沼地、三角洲等の總稱にして或は泥沙の蔽ふ所と成り或は流水の襲ふ所と成ることあるも概して地味肥沃にして最も人類の生息に適し耕耘の利を與へ交通の便を與ふ實に低地は人生發達百業開進の淵源と云ふも敢て過言に非ざるべし

高地

高地は山地の如き欠點なきも亦低地の如く充分なる便益を與ふを得ず、人類の生息に適せざるに在らざれども氣候凜烈にして寒暑の差異著しく乾燥に失するの患なしとせず、地味は肥瘠相半して耕耘よりは寧ろ牧畜に適す、谿谷の流水を利用し得るも亦交通上、多少の不便なき能はず

我が帝國は狹長にして島嶼の群集より成れるが特に激烈なる噴火作用を蒙りし形跡著しく土地の起伏甚しく到る處山岳を見ざることなく所謂山國なり、然れども規模宏壯にして重厚なる山脈に富まざるを以て眞の

山地の分布

山地と稱すべきもの甚だ多からず、邦土の主要なる部分は高地に屬せり、低地の如きは僅に全土の七分の一を占むるに過ぎざるべし

今左に各種の土地の分布并に情況の一斑を記述せん

山地の主なるものは十州島にありては千島帶山脈、日高山脈及び後志山彙に屬せり、本州島に於ては中央山脈、富士帶山脈、赤石山脈に屬するもの多く、特に日光山地、飛騨山地を以て顯著なるものとす、又羽越山脈、紀伊山系中にも山地に屬すべきものあり、四國島にありては四國山脈の中央に山地あり、九州島に於ては山地の多くは阿蘇山脈、又は南部山系に屬せり、又臺灣島にありては重峯疊巒連綿して土地の四分一を占む

高地の分布

高地は前にも述べし如く本邦の主要なる部分を占むるものなれば到る處に散布せられ實に枚擧するに遑あらず、十州島の北東山脈、日高十勝の高原を始めとし、本州島の中央高地、紀伊高地、中國高地等は最も著しきものなり、四國九州の二島に於ては高地に屬する部分甚だ多し而して臺灣島にありては高地は東部に偏在せり

Handwritten signature or mark at the bottom right of the page.

次に我が帝國の富源に對し重大なる關係を有する平原の情況を記述せん。其の種類を擧ぐれば三あり、其の一を山岳丘陵の間にある^{谿谷平原}とし、其の二を重厚なる沖積層より成れる^{沖積平原}とし、其の三を山地臺地の緩慢なる斜面にして海岸に接する^{沿岸平原}とす。而して本邦の平原は第一種に屬せるもの殊に多く、第二種之に次ぎ第三種に至りては其の數甚だ多からず。

十州島の平原

十州島の平原中にて最、廣大なるものを石狩平原と南東平原とす。其の他天鹽平原、北見平原を以て稍、著しきものとす。石狩平原は南西海濱より起りて愛別地方に至る、石狩川の流域に當りて長、三十七里、濶、五里餘あり、神威古譚に依りて二部に分たる。下流の地は概々、土壤深く地味膏腴なれども、往々卑濕に過ぐるものあり、上流の地は地層淺く砂礫露出して乾燥に失する處少ならず。南東平原は廣大なる低地にして千島帶山脈と日高山脈との間に挟まるる沿海の地方に跨る。其の十勝平原は廣袤各、二十餘里に亘り灌漑の利漕

本州島の平野

運の便ありて地味も亦肥沃なり、其の釧路平原は濕地多く地味不良なり、其の根室平原は土性の肥瘠乾濕一様ならざるも耕耘牧畜に適するもの少なからず。

本州島の平原に就きて廣袤の稍、大なるものを擧げんに、奥の平野は本州島の北東部を占むる狹長なる低地にして二つの平野より成れり、其の北上平野は中央山脈と北上山脈との間にありて廣袤稍、曠遠なるも地味は確確なるか又は濕潤に過ぐる處多し、然れども南部の宮城野の如きは地味肥沃にして耕耘に適す、其の阿武隈平野は中央山脈と阿武隈山脈との間にあり、灌漑は宜しきを得、地味は悪しからず、頗る耕耘に適す。然れども阿武隈川及び其の支流の泛濫するありて損害を蒙むること少しとせず。

最上平野は最上川の流域に亘り南北數十里に達する低地なり、土性佳良なるも氣候少しく寒冷に過ぎ交通の便利あらざるが故に未だ充分に利用するを得ざるも亦北東地方の一大沃野たるを失はず。

會津平野は四圍に山脈を控ゆる平野にして廣袤は甚大なるにあらざるも、地味は概佳良にして數流の河水は灌漑の利を興ふるが故に頗る耕耘に適せり

越後平野は日本海に瀕して南西より北東に亘れる低地なり、其の潤きは甚大ならずも長は凡四十里に達せり、濕潤は宜しさを得、地味も亦佳良なり、是れ當地方が農産地として世に名ある所以なり

關東平野は本州第一の平野にして廣袤共に三四十里に達す、利根川及其の支流の之を貫流するあるのみならず又霞浦、北浦、印旛沼等の潤はす所たり、灌漑の利と交通の便とを併はせ有つこと他の平野に冠絶せり、土壤は瘠鹵確なる處なきにしもあらざれども概して地味は肥沃なり

濃尾平野は木曾川及其の支流の流域にあり、地味極めて豊饒にして灌漑も頗る便利なり、然れども土地低く河床高き處ありて洪水の際には損害を蒙むること甚大なり

幾内平野は淀川及大和川の流域より成る、灌漑の利ありて地味も亦豊

なり、殊に風景の秀美なる他の地域の比にあらす、是れ當地方の夙に開明の域に進み我が邦土中、人生の最發達せる處なりと稱せらる、故ならんか、前記の平野の外、他に稍著しきものと云ふべき平野を擧ぐれば北に津輕平野、秋田平野あり、中部は北陸地方并に東海地方に沿岸平野あり、西部には豊饒なる播磨平野の内海に臨みあり、江の川に沿ひ、矢道湖及中海に瀕する出雲平野の日本海に面するあり而して沿岸溪谷の小平野は其の數夥しくして實に枚擧するに遑あらず

四國島の平野

四國島は高原性を帶ふるを以て海岸に接する處に低地を見るの外、廣袤の大なる平野の存するあるなし、然れども讃岐平野、吉野平野は廣袤稍著しく、殊に地味の肥沃なる、濕潤の適當なる眞に農産上無比の良地たり、然れども吉野川沿岸地方は河水の泛濫するありて屢、悲境に陥るを見る

九州島の平野

九州島は山地と高地に富むが故に曠漠たる平野の存するあるを見ず、然れども筑後川、菊池川、緑川、川内川等の沿岸にある平野は其の地味極めて肥沃なり、加ふるに氣候の暖和なる灌漑の充分なる實に好農産地、好牧畜地た

るの資を備ふるもの甚々多し

臺灣島にありては低地は島の西半部を占むるが地味は一般に肥沃にして稼穡を施すに適せざるものは甚々少なきが如し而して未だ開墾せざるの地には樹木鬱蒼として繁殖し天然の森林を爲す從て不毛の赭土を見ること極めて稀なりとす

●氣候

氣候なるものは寒暖陰晴雨雪風向等天氣に關する諸現象を網羅すると同時に其の原因に於ても甚々錯綜せるものなり而して此等原因中の主要なるものを適示すれば緯度の高低土地の高低土地の性質土地の状態海陸の關係海流及氣流の方向なりとす
此等の原因が如何なる關係に依りて氣候に影響を及ぼすかは地文學を講述するときに於て充分なる説明を與ふることとし今茲には本邦の氣候の大要を記述するに過ぎざるべし

我が國は太平洋の西隅に於ける島嶼より成れるを以て氣候は概して寒暖乾濕共に中和を得たりと云べし然れども其の疆土たるや狹長にして南北に亘り殊に一葦水を隔て、アマア大陸に對するを以て氣候は一樣ならず地方に依りては炎熱を感ずるあり嚴寒を覺ゆるあり或は寒暑の差の酷しきと否らざるあり又は降雨の季節量積を異にするあり

其一 溫度

我が國の溫度を同緯度の他の諸國に比するに稍、寒冷なるもの、如し蓋し黒潮暖流の恩恵を蒙むるも亦寒烈なるシベリア平地に遠からざるのみならず低温なる千島寒流樺太寒流の影響を受くるが故なるべし而して寒暑の間に於ける懸隔も亦稍、著しとす要するに我が國が大小數百の島嶼より成るものなるに拘らず溫度は純然たる島嶼的兆候を呈せずして稍、大陸的たるの情勢ありされば溫度の分布寒暑の差違等に就きて我が國の氣候を概評すれば大陸的島嶼氣候なりと云ふの適當なるを知る然れども

我が國は狹長にして南北に亘り山岳に富めるを以て各部に就きて多少の差異を見るも亦自然の理なり由て左に各地方に於ける温度の概況を記述せんとす

臺灣島の温度

臺灣嶋は我國の南端にあるを以て其の地の氣候は平均二十一度以上二十五度以下にして夏季は炎熱を覺ねざるにあらざれども三十七度に達することなく冬季は高山の頂に雪を戴くことあるも低地にありては三度以下に降ること稀なり

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒暑の差
恒春	二四・七	三三・四	二二・八	一一・六
臺南	二四・六	三二・九	二二・五	一一・四
臺中	二二・三	三二・四	二二・二	一一・二
臺北	二二・七	三二・四	二二・三	一一・一
澎湖島	二二・六	三三・三	二二・九	一一・四

南西諸島は帝國の南部に位せるを以て酷暑の土地なるべしと思はるれ

南西諸島の温度

は實際は然らずして寒暑の差の著しからざる海候的暖國たるに過ぎず、夏日は太平洋より吹き來たる涼風が炎熱を除去することあるも冬日は大陸より起る烈風が寒氣を輸送することなし

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒暑の差
石垣嶋	二二・九	三三・九	七・四	二六・五
那覇	二二・〇	三三・〇	六・七	二六・三
大嶋	二二・二	三三・六	五・二	二八・四

九州四國の温度

九州四國の地方は盛夏の候に當りては我が國にて最高温度となす點に達することあるも冬季は甚だ寒冷なることなく概ね寒暑の間に著しき懸隔を見ず然れども熊本に於ては寒暑の差稍著しくして四十六度に達することあり、但し(一)は零度下を指示す

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒暑の差
鹿兒嶋	一六・九	三六・二	(一) 六・一	四二・三
熊本	一五・九	三六・三	(一) 八・六	四四・九

帝國大地理

本州島の温度

本州島の南岸及び東岸に瀕する部分は黒潮暖流の影響を受くるを以て温暖宜しきを得て寒暑の差異も烈しからず然れども日本海に面する地方并に北東部の親潮に洗はるゝ地方は稍々寒冷なり又中央の高地に位せる

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒暑の差
佐賀	一五、六	三六、六	(一) 五、八	四一、八
長崎	一五、六	三六、七	(一) 四、九	四一、八
佐世保	一六、〇	三六、〇	(一) 五、二	四一、二
福岡	一五、〇	三六、四	(一) 五、二	四一、六
嚴原	一四、八	三五、八	(一) 八、六	四四、四
大分	一五、三	三六、〇	(一) 五、三	四一、三
宮崎	一六、六	三六、七	(一) 六、四	四〇、三
高知	一五、七	三五、九	(一) 七、〇	四一、九
徳島	一五、三	三五、八	(一) 五、四	四一、二
多度津	一五、三	三五、六	(一) 四、六	四〇、八
松山	一四、九	三六、〇	(一) 七、〇	四三、〇

地方は一層低温にして寒暑の懸隔も甚しきが如し

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒暑の差
赤間關	一五、〇	三五、九	(一) 六、五	四三、四
山口	一四、〇	三五、四	(一) 二、五	四六、九
廣島	一四、六	三七、五	(一) 八、四	四三、九
呉	一四、四	三五、六	(一) 七、一	四三、七
味野	一五、一	三五、九	(一) 五、七	四三、二
岡山	一四、五	三五、六	(一) 八、一	四三、一
神戶	一五、一	三六、〇	(一) 五、〇	四一、〇
大坂	一四、八	三六、五	(一) 七、一	四三、六
和歌山	一五、二	三六、六	(一) 五、四	四三、〇
京都	一三、七	三六、四	(一) 一、七	四八、三
八木	一四、三	三四、九	(一) 五、七	四〇、六
彦根	一三、七	三三、〇	(一) 八、七	四三、七

帝國大地誌

輪島	金澤	福井	境	濱田	山形	福嶋	宇都宮	鹿谷	前橋	長野	松本	飯田	甲府
三三,三三	三三,一三	三三,三三	三三,二二	三三,四六	三三,〇六	三三,一八	三三,三三	三三,〇〇	三三,二六	三三,〇〇	三三,〇六	三三,〇〇	三三,三三
三三,三三	三三,六八	三三,六四	三三,七八	三三,六七	三三,六八	三三,六〇	三三,九〇	三三,六六	三三,五五	三三,〇〇	三三,二二	三三,七七	三三,六六
(一) 五八	(一) 七四	(一) 八八	(一) 八二	(一) 六七	(一) 二〇,〇〇	(一) 二八,五	(一) 二二,八	(一) 八二	(一) 八六	(一) 一五,九	(一) 一八,二	(一) 二二,四	(一) 二七,二
三九,一	四四,二	四五,二	四六,〇	四三,四	五六,八	五四,五	四六,七	四四,八	四三,六	五〇,九	五三,四	四四,三	五三,八

七九

青森	宮古	石巻	水戸	銚子	東京	横濱	横須賀	長津呂	沼津	横松	名古屋	津	岐阜
三〇,〇	九,九	一一,一	三三,四	三三,〇	三三,八	三三,二	三三,六	三三,一	三三,〇	三三,〇	三三,五	三三,六	三三,三
三三,六	三三,二	三三,八	三三,九	三三,六	三三,六	三三,五	三三,五	三三,五	三三,一	三三,二	三三,五	三三,二	三三,二
(一) 一〇,〇	(一) 一五,四	(一) 一三,六	(一) 八,八	(一) 七,三	(一) 九,二	(一) 六,七	(一) 六,二	(一) 〇,八	(一) 八,七	(一) 五,五	(一) 九,五	(一) 五,七	(一) 二,七
五四,六	五二,六	四八,四	四八,七	四〇,九	四四,八	四二,〇	四二,七	三三,三	四三,八	四二,七	四六,〇	四〇,九	四九,九

七

伏木	三三、一	三五、九	(一) 九、八	四七、七
新潟	二二、六	三六、一	(一) 九、四	四七、五
秋田	一〇、三	三三、四	(一) 二四、六	六〇、〇

十州島の温度

十州島は四大島中の最。北部に位せるものなるのみならずシベリア地方に接近するを以て概して寒冷なり、一月の平均温度は零度下數度にして盛夏の候と雖、平均温度は二十度前後に過ぎず、殊に東岸千島海流の衝に當る地方并に中央の高原に位する地方の寒氣は一層凜烈なるが如し、然れども日本海に瀕する地方并に宗谷海峽附近は黒潮海流の餘派を受くるを以て稍、温暖なるを覺ゆ。

地名	年平均	最高温度	最低温度	寒害の度
國館	八、四	三三、六	(一) 二二、七	五三、三
十勝	四、八	三六、〇	(一) 三三、二	七〇、〇
網走	七、〇	二九、六	(一) 一五、九	四九、五
釧路	四、七	三三、七	(一) 三三、七	五三、三

各月の温度

地名	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	十月	十一月	十二月	全年
釧路	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
宗谷	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
網走	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
根室	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
札幌	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七
上川	六、〇	五、五	五、五	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七	五、七

而して各地に於ける温度を十二ヶ月に分ちて観測するに驗温器は概一月に最低を示し八月に最高を示すが如し、今左に恒春外十一ヶ所に於ける各月の平均温度を摘記したるを以て該表を一覽せば此の意を了知するを得べし。

帝國大地誌

長崎	五七	六三	九二	一四六	一八二	二二〇	二六二	三〇六	三六〇	四一〇	四六〇	五一〇	五五〇	六〇〇	六五〇	七〇〇	七五〇	八〇〇	八五〇	九〇〇	九五〇	一〇〇〇	
高知	五〇	六〇	九〇	一四〇	一八〇	二二〇	二六〇	三〇〇	三四〇	三八〇	四二〇	四六〇	五〇〇	五四〇	五八〇	六二〇	六六〇	七〇〇	七四〇	七八〇	八二〇	八六〇	九〇〇
和歌山	四〇	五〇	七〇	一二〇	一六〇	二〇〇	二四〇	二八〇	三二〇	三六〇	四〇〇	四四〇	四八〇	五二〇	五六〇	六〇〇	六四〇	六八〇	七二〇	七六〇	八〇〇	八四〇	八八〇
廣島	三〇	四〇	六〇	一一〇	一五〇	一九〇	二三〇	二七〇	三一〇	三五〇	三九〇	四三〇	四七〇	五一〇	五五〇	五九〇	六三〇	六七〇	七一〇	七五〇	八〇〇	八四〇	八八〇
東京	二〇	三〇	五〇	一〇〇	一四〇	一八〇	二二〇	二六〇	三〇〇	三四〇	三八〇	四二〇	四六〇	五〇〇	五四〇	五八〇	六二〇	六六〇	七〇〇	七四〇	七八〇	八二〇	八六〇
金澤	一〇	二〇	四〇	八〇	一二〇	一六〇	二〇〇	二四〇	二八〇	三二〇	三六〇	四〇〇	四四〇	四八〇	五二〇	五六〇	六〇〇	六四〇	六八〇	七二〇	七六〇	八〇〇	八四〇
宮古	五	一〇	二〇	四〇	六〇	八〇	一〇〇	一二〇	一四〇	一六〇	一八〇	二〇〇	二二〇	二四〇	二六〇	二八〇	三〇〇	三二〇	三四〇	三六〇	三八〇	四〇〇	四二〇
上川	〇	一	二	四	六	八	一〇	一二	一四	一六	一八	二〇	二二	二四	二六	二八	三〇	三二	三四	三六	三八	四〇	四二

其一一 雨雪

我が國は四圍に海洋を環らす島嶼より成るのみならず暖流は殆ど其の沿岸を包み陸上には山脈の蜿蜒として隆起するあり加ふるに多少の濕氣を輸送し來る季候風若しくは貿易風の影響を蒙るあり従つて我が國は

概して降雨の多き土地にして灌漑の利便を得るのみならず又清水は至る所に湧出して飲料に事を欠かざるは實に天の賜と云ふべし然れども細かに年々の雨量を観測し來れば地方と季節とに依りて其の情態を異にせざるに非ず

各年の雨雪量

先づ雨量の全年平均に就きて言はんには我が國の降雨の最も多きは南西諸島及び潮の岬附近にして其の量積は三千耗に達せり之に次ぎて降雨の多きは臺灣嶼九州島の南東面四國島の南岸對馬島本州島中部の北岸福井二四六一 金澤二五〇六等にして其の量積は二千耗以上に達せり而して雨量の一千五百耗以上二千耗以下の地方は九州島の北東部四國島の高地本州島西部の北岸北部の西岸并に東海に瀕する地方なり其の他瀬戸内海沿岸地方本州島の中央山脈地方及び北部の東岸并に十州島東部の雨量は一千五百耗以下なり特に本州島の中央高地の北部十州島の北岸は降雨最も少なくして其の量は一

四季の雨量

山口	山	境	長	佐	豊	福	金	輪	伏	高	宮	鹿	益	臺	臺	恒	大	那	石
一八七一	一八一六	一九五七	一六一四	三三三〇	二四六二	二五〇六	二〇八八	二二二二	二七〇一	三三三〇	三〇五三	三三三六	三三〇一	一八三五	三三三二	三三三二	三三三二	二二八一	二七二七
京都	京都	大	赤	佐	熊	秋	新	布	横	横	沼	濱	津	名	飯	岐	彦	徳	
一五三三	一五三七	二五七七	二五七六	二五三九	二五二五	二七三九	二七七八	二〇二四	二七五八	二七五八	一八三〇	一八〇〇	一七五五	一七〇七	一八〇〇	二〇三九	一八六五	一七三三	
前	甲	青	青	彭	宮	熊	大	神	吳	東	長	八	和	廣	福	水	饒	宇	
二四二一	二二六〇	二二〇五	二二八六	二三四一	三三三五	二三五六	三三三二	二二六七	二〇七七	二四七六	二四一五	二四二六	二四〇六	二四七一	二四六〇	一五七三	一五九〇	一五八三	
福	山	根	網	宗	十	巖	札	上	長	松	岡	味	多	松	函	石	山	福	
二二二五	二二八九	二二四四	七〇九	八三八	九六〇	九七八	九七一	九六三	二〇七三	二〇九八	二〇六一	二〇三七	二〇七四	二一九四	二二二七	二二四四	二二八九	二二三五	

八四

而して季節に依りて雨量の多少を観測すれば

春季(三、四、五の三ヶ月)に於て雨量の一千耗以上に達する地方は紀伊の南東岸并に南西諸島のみにして之に次ぐを九州島の南部とす而して本州島の中央山脈地方及び十州島の東部は降雨稀にして其の量は二百耗以下なり
 夏季(六、七、八の三ヶ月)は降雨多き季節なり特に六月は梅雨と稱する霖雨の候にして陰雨濛々として人畜に不便を與ふるの感ありと雖も土壤は之が爲に充分の濕潤を得て大に草木の繁茂を助くと云ふ此の季節に於ては臺灣島四國島の南岸并に本州島中部も場所に依れば一千耗以上に達せり然れども本州島の北部は三四百耗に過ぎず殊に十州島の北岸に於ては二百耗以下なり

秋季(九、十、十一の三ヶ月)は降雨の配布稍、全國に平均せる傾向ありて一地方に偏すること少なし而して八百耗以上に達する地方は九州島の東岸四國島の南岸、紀伊の南東岸にして中國の中部、中央高原の北部、十州島の東部の如き地方に於ても二百耗以上に達せり

帝國大地誌

八五

冬季十二、一、二の三ヶ月に於ては雨雪の降下は本州島の沿岸地方に偏し殊に加賀能登地方にありては八百耗以上に達せり然れども其の他の地方に於ては雨雪量の三百耗以上に達すること稀にして内海沿岸地方、本州島の中央山脈、十州島の東部は二百耗以内なり而して臺灣島の南端、知床半島の如きは百耗に達することなしと云ふ

次に降雨の配布を十二ヶ月に分ちて観測すれば概ね六月と九月との二ヶ月に於て雨量の多きを知る(次表の各数の單位は一耗なり)

	恒春	大島	長崎	和歌山	廣島	東京	金澤	函館	網走
一月	10,9	20,0	8,1	4,6	4,3	5,8	27,5	5,9	2,9
二月	83,0	22,6	87,0	7,5	6,1	78,6	27,7	4,3	23,4
三月	48,2	33,1	33,5	9,0	10,3	10,8	16,7	6,0	36,1
四月	16,5	37,5	12,7	10,1	12,2	12,1	18,1	7,3	4,4
五月	46,9	22,7	22,8	22,7	27,5	15,2	14,0	8,6	4,6
六月	35,7	22,2	32,1	17,5	33,8	17,7	17,7	9,6	6,5

七月	33,4	27,4	22,0	13,1	15,6	11,1	10,1	13,6	8,8
八月	48,1	18,1	20,5	8,0	8,2	11,2	14,3	11,2	8,4
九月	22,6	33,8	21,1	20,4	16,2	20,2	19,6	18,6	26,8
十月	22,6	27,7	10,2	13,2	10,2	17,0	19,0	10,5	6,2
十一月	15,0	23,9	2,1	10,6	7,0	11,6	27,3	10,5	5,8
十二月	13,8	18,0	8,3	5,7	4,2	32,3	7,8	4,3	4,3
合計	293,7	342,1	194,6	106,1	127,1	75,6	250,9	116,6	70,9

又我が國は島嶼より成りて緯度の甚だ高からざるに拘らず、氣候中稍、寒冷に傾けるを以て冬季は南西諸島を除くの外、全國至る處に多少の降雪を見ざることをなし然れども該季節に於ては空氣概ね乾燥にして國の大半は快晴の天氣の下に日を送るの情態にあれば降雪の量多からず、唯、日本海より吹き來る濕風が同海の沿岸地方に多量の雪を降下せしむるのみ殊に能登半島附近并に越後の或一部の如きは降雪最も多く積雪の丈餘に達する處少しとせず

其三 風

氣流は温度の變化に依りて起るものなれば温度の變化急激なれば風位に影響を及ぼすこと亦大ならざるを得ず而して我が國は大陸と太平洋との間にありて、其の温度の變更、氣流の方向に變化を來たすのみならず山脈の趨勢、海陸の分布等、種々なる原因ありて風位の不定を生じ實に一定の規律あるを疑はしむ、然れども實際の觀測に依りて考ふれば最、多き風位は北西及び北にして西風之に次ぎ南風東風の如きは最、少しとす、是れ我が國の東と南は太平洋に瀕するも西と北とは僅に一葦水を隔て、大陸を控ゆるに依るならん、特に夏日は太平洋より大陸に向ひて進行する南風又は南東風の多くして冬日は大陸より吹き來たる北西風又は北風の多きを觀る。寒暖二候の交替する際即、三月若くは九月頃に至り烈風の起ることあり特に農家の所謂厄日と稱する二百十日、二百二十日即、九月中旬頃に起る秋季の颶風を以て最、激烈なるものとす而して此の颶風は規模宏大な

風向

颶風

る旋風にして其の中心の多くは南の方、ヒリッピン群島若しくは臺灣島附近より起り北東の方に向ひて進行し我が九州、四國の二島を経て斜に本州島を横斷し十州島に到りて消滅するものゝ如し

●天産

我が國の天産に就きて一言せんには
 礦物。は其の種類少なからずと雖、其の量より見るときは有用なるものに乏しと云はざるを得ず、金屬中には金、銀、銅、鐵、アンチモン、等を産するも其の量頗る多からず、獨、銅鐵のみは其の産額稍、著しとす而して非金屬中には石炭あり硫黄あり石油あり陶土ありて其の産額も亦少なしとせず、然れども石炭の如きは其の素質の佳良なるもの甚、多からず

本邦は狭長なる群島より成りて南北に亘るを以て温度に著しき差異ありて植物の分布上、熱帶、半熱帶、温帶、冷帶、寒帶の別あるも四面に海を環らすが故に濕潤宜しさを得、土壤概、膏腴なり、されば植物の發育盛にして其の

礦物

植物

種類も極めて饒多なり、従つて此の種の天産に富めると素より礦物、動物の及ぶ所にあらず、木材には松、杉、樅、檜等あり、果樹には桃李、柿、柑、林檎あり、花卉には櫻、梅、山茶花、茶梅等あり、其の他、桑あり、茶あり、楮あり、檀あり、樟樹あり、又竹類にも乏しからず、海藻には昆布、荒布、和布、海苔、海羅、鹿角菜等あり、而して少しく人力を加ふれば五穀の成熟頗る佳良にして、甘藷、煙草、甘蔗等の生育も亦盛ならざるに非ず。

我が國土は太平洋中より迸出したる群島なれば大陸に接近するにも拘らず、孤立せるの姿あり、加るに土地狹長にして深山幽谷に乏しきが故に動物の蕃殖は甚だ盛ならず、野猪、猿猴、兎、狐等の如き普通の野獸の外別に猛獸奇獸の棲息するあるなく、僅に熊、狼、鯨の如き數種あるのみ、又鳥類も其の種類甚だ多からずして、鷹、鷲、雉、鳶、鳥の如き尋常の鳥類に過ぎず、然れども近海は暖流と寒流との衝に當るを以て魚類に富めること實に世界有數の産魚地たり、鯉、鮪、鯖、鰯、鳥賊を始として、鱈、鮭、鱒等の生産最も多しとす、其の他、鯛、比目魚、介類の如きも其の生産尠ならず。

以上帝國の地誌に關し天然の狀勢を陳述したるに由り今之を概論し以て其の局を結ばんとす、抑、我が大日本帝國は東洋の島嶼國にして四面繞らずに滄海を以てするが故に、外國の侵害を受くるの患少なく隣邦と疆土を接せざれば交渉事件を起すの煩累なく、獨行して其の欲する所を爲を得べし、然れども其の地勢狹長にして廣袤大ならざるを以て、縱令山河の形勢幽麗妙美にして絶景佳境、各處に散點すと雖も、高嶺の峨々たるもの、大河の洋々たるもの甚だ少なく、天然の境遇總べて小規模にして壯觀宏裝の人を驚かすに足るものなし、國內に山岳峻坂多く曠原平地少なきが故に相互の交通に不便を與ふるも之が爲に降雨頻に至りて水源を充盈し灌漑の益あること少なからず、河川は其の數多きも概々細流にして漕運の用を爲すもの少しと雖も、之を補ふに四圍の環海に航行するの便を以てすべし、氣候概々温和にして人身の健康に適すと雖も、北地の冬期は頗る沍寒にして南地の夏期は炎熱堪え難し、地味は肥沃なるもの少なからざれども、地積の少なからざるを如何せん、天産は饒多なれども亦必要の物産に缺くる所なきに

非ず、要するに我が國は一利一害あるを免れずと雖、之を他の國と對照すれば實に造化の惠澤に浴すること大なりと云はざるを得ず、斯の如き國土を享有する我が國民は如何に其の邦土を利用するか、此の土に依りて國を建つる人民は如何に有力なるか、其の人果して卓犖秀拔の氣骨を有するか、其の民果して寬融壯大の識量を具ふるか、鱗楯を率ゐる火船に乗り太平洋を領海視し萬里の波濤を隔つる遠き國土を拓殖撫育するの膽力あるか、百業を勵み實益を重じ姑息の計を捨て、遠大の謀を採り眞の富國強兵を致さんとするの忍耐力あるか、此等に就きて研究するは政治地誌の範圍に屬するが故に其の章下に詳述すべし

政治之部

●住民

國土の境域廣濶なるは固より希望する所なりと雖、唯、其の廣濶なるのみを以て満足するを得ず、各種天産の饒多なるは固より希望する所なりと雖、唯、其の饒多なるのみを以て満足するを得ず、此の廣濶なる國土に生存する人類の之を利用するありて始めて其の貴重すべき所以を知るなり、此の饒多なる物産に衣食する人類の蕃殖するありて始めて其の貴重すべき所以を知るなり、今茲に一國あり其の廣袤巨大にして自然の富源を備ふるも之を開拓し之を利用する人類の生息寥々なるに於ては所謂實の持腐れなるものにして亦些少の功益なかるべし、されば邦國の盛否を卜するには其の國內に居住する人類の多寡、種族、性情等を調査探究すること實に緊要なりとす

其一 人口

人口の總數

我が帝國の人口總數は明治三十年末の調査に依れば四千五百六十八萬餘にして其の中、二百四十五萬餘は臺灣島に屬せり

帝國人口總數	
本州島	三三九、二〇八
九州島	六六九、八五四
四國島	二九七、八二二
臺灣島	二四〇、三九七
十州島	五五、七九〇
琉球諸島	四四、七七八
淡路島	一九、三三三
佐渡島	一一、四四九
澎湖群島	五、一八三
臺北島	三、六〇三
基隆諸島	三、五〇一
小笠原群島	二、五三〇
千島列島	一九九五
合計	四、五六八、四七三

而して我が國の人口と海外諸國の中にて顯著なるものの人口とを比較對照して一表を作れば本邦の人口が中位以上を占むるや否やは自ら明なるべし

國名	本國	全部	國名	本國	全部
シロイツ	三二一、九六五		イギリス	四〇五、九九五	三、八〇、一〇、三九五

人口の疎密

我が國の人口の疎密を考ふるに平均一方里に付一千六百八十八人一方里に付百十八人の割合なり、又臺灣島を控除すれば一方里に付一千七百四十三人、一方里に付百十三人と成るなり、然れども人口の疎密は地方に依りて大に其の度を異にし、往昔より人生の發達したる地は人口甚だ密なれども近年の開拓に係れる地は人口極めて疎なり、且又小島は大島に比し人口の密なるもの多し

分界	面積	積人口	一方里に付
總内	四四五、五九	二六七、四八七	六〇三

東海	中山	中道	畿奥	北陸	山陽	山陰	南海	四海	北海	佐賀	豊後	豊前	對馬
道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道	道
二六五八、八〇	二六〇三、九七	四二四七、三三	一五七七、七九	一〇八七、六六	一五七〇、〇七	一五三一、七八	二六二七、五四	六〇九五、三六	五六、三三	二一、二六	二一、二六	二一、二六	二一、二六
九九五、一九三〇	四四四、七四	四七、三七八八	三八九、三五五五	一八五、〇五七六	四二、二二五七	三三、三三三六	六二八、〇三六五	五五、九八八五	二一、〇〇〇八	三、五三三六	三、六六〇三	三、六六〇三	三、六六〇三
三、七四三	一、七三三	一、二二四	二、四六八	一、七〇二	三、七三三	三、三三八	三、三六一	一、九	三、三六一	三、三六一	三、三六一	三、三六一	三、三六一

人口の増加

我が國の人口の疎密は前表に依りて明なり而して之を世界の他の諸國に比較せん爲に一方料に付きての人口を列擧すればハルワック(二二六)、オランダ(一五四)、イギリス(一二九)、イタリヤ(一一〇)、日本(一一三)、ドイツ(九七)、フランス(七二)、シウワイツ(七六)、エスタルライヒ(七二)、清國(六四)、デンマルク(六〇)、ホルトガル(五二)、エスバニア(三六)、ギリシア(三七)、ロシヤ(一九)、アメリカ合衆國(一〇)を得、以て此の點に就きて我が國が如何なる地位にあるやを知るを得べし

次に本邦(臺灣を除く)の人口の増加の景況に就きて一言せんに先づ明治十四年以降の人口表を掲ぐれば

琉球	小笠原	産	澎湖	澎湖	總計
二五九、九二	四、五〇	三、三三三、三三	二、三三三、三三	二、三三三、三三	二、七〇六、九三
四、七、七、七	三、三、三	三、三、三	三、三、三	三、三、三	三、三、三
二、八、五、五	三、六、〇	一、〇、六、六	三、六、七、〇	三、六、七、〇	一、六、八、八

年次	人口	百人二付年増加	年次	人口	百人二付年増加
明治十四年	三六三五、八九九	一、三〇	明治二十三年	四〇四五、三四六一	〇、九五
同十五年	三六七〇、〇一八	〇、九四	同二十四年	四〇七二、八六七七	〇、六六
同十六年	三七〇一、七三三	〇、八六	同二十五年	四一〇八、九九四〇	〇、九一
同十七年	三七四五、一七六四	一、二七	同二十六年	四一三八、八三三三	〇、七三
同十八年	三七八六、八九八七	一、二二	同二十七年	四一八一、三三二五	一、〇一
同十九年	三八五〇、七一七七	〇、九三	同二十八年	四二二七、〇六三〇	一、〇七
同二十年	三九〇六、九六六一	一、四六	同二十九年	四二七〇、八二六四	一、〇四
同二十一年	三九六〇、七三三四	一、三八	同三十年	四三三三、八八六三	一、三三
同二十二年	四〇〇七、二〇三〇	一、二七	同三十一年	四三七六、〇八二五	一、〇三

前表に依りて之を觀れば人口の年増加は凡そ百分の一にして我が國の人口は一百年毎に二倍するの割合なりされば増加の迅速なる之を海外諸國に比して僅に中位以上を占むるは疑ふべからざる事實なり是れ畢竟我

人口男女別

が國土の氣候、山河の形勢、社會の狀態等が人類の蕃殖に適合するに由るものにして實に喜ぶべきの現象ならずや
我が帝國除く海峽の人口四千三百二十三萬を男女に別たんか男子に二千一百八十二萬人ありて女子に二千一百四十一萬あるが故に男子の數が女子の數を超過すること四十一萬にして所謂女少國なり然れども人口國別表に依れば山城、和泉、攝津、志摩、尾張、三河、遠江、越前、加賀、佐渡、肥後、薩摩、琉球等は例外にして男少國なりとす而して海外諸國に就きて人口男女別を作れば次表の如くにして古國に男少國多く新國に女少國の多きを見るべし

國名	男	女	合計	男少國
ドイツ國	二五、六六一、二五〇	二六、六一、八六五	五二、二七、九一五	男
イギリス聯合王國	一八、三八、四二六	一九、四九、六六三	三七、八八、〇七九	男
フランス	一八、九三、三三五	一九、一〇、一〇三	三八、〇三、三三八	男
エステルライヒ	二〇、三五、七三〇	二〇、〇〇、一九〇	四〇、三五、九二〇	男
ワルガルヌ	三三、三六、六一〇	三三、三三、五五二	六六、七〇、一六二	男
ベルジック	三三、三六、六一〇	三三、三三、五五二	六六、七〇、一六二	男

帝國大誌

オランダ	三三三,八四八七	二二八,二九三八	五六一,五四八五	男
シベリヤ	一三三,七〇五七	一三〇,〇六三	二六三,七六八七	男
エヌバニア	八七,七三三〇	九三,一七〇〇	一八〇,九〇三〇	男
ホルトガル	二四三,〇三三	二六,九三九〇	二七〇,〇七二九	男
ロシア國	六三三,一五五六三	六三三,三三六四	一二六六,八八二七	女
ヨーロッパ	四六四,七九三三	四七,七六七五	九一二,五六一五	男
オーストラリア	四七,六〇〇七	四六,九一九三六	九四,五九四三	女
オランダ	四八,一〇五四	四三,七六六一	九一,八六六一	女
シベリヤ	二二,五五五九	二七,二二三三	四九,七八九二	女
中央アジア	四一,五八九〇	三五,六一七〇	七七,一六六〇	女
イタリヤ	一四,六五三三	一四,九二四三	二九,五七七六	女
アメリカ合衆國	三三〇,六七八〇	三〇五,五三七〇	六三六,二一一〇	女
ブラジル合衆國	二〇八,八九一九	一八六,五九九三	三九五,四九一一	女
アルロエンチナ	七三三,七九三三	七〇九,五九八三	一四四三,三九一五	女

在外邦人

本邦人にして、海外に在留するもの数は未だ著しからざるも近來漸次に増加して明治三十一年末には總計凡そ七萬一千人と成りたり、今之を領土別に爲し且、在留者三百人以上の地を掲ぐれば左表の如し

國名	男	女	合計
1. アメリカ合衆國及び領土	三、五八四〇人	七、八六七人	四、三七〇七人
ハワイ諸島	二、七二〇人	七、三三三	一〇,〇五三
カリフォルニア州	三、三三三	一〇七	三,四四〇
サンフランシスコ及び附近	二、五八八	一八〇	二,七六八
2. 韓國	八、六二〇	六、六八四	一五、三〇四
釜山	三、三三三	二、九三三	六,二六六
仁川	二、二六三	一、八三八	四,一〇一
京城	二、一〇七	八七七	二,九八四
元山	九二二	六四八	一,五七〇

水浦	五二九七	一〇二二	六三二一
イギリス及び領土	二七四八	二二七	一八六五
オーストラリア及び附近	三三三三	二〇三	一四二六
木曜島及び附近	三三三	三六四	四九二
シンガポール	二二七	三三三	四九二
マニラ	三三三	三三三	三六八
フィリピン	三三三	三三三	三三三
香港	一六〇	一五七	三三三
4. ロシア及び領土	一六五二	一六〇六	三二五七
ウラヤチナ	七三三	九三八	一六七〇
サハリン	四四九	三三三	四三三
5. 清國	一三三三	四四九	一七八二
上海	三三三	三三三	九三三
厦門	三三三	三三三	三三三

1011

在留外國人

6. ドイツ	一三〇	三	三三三
7. フランス	八一	三〇	二〇二
8. 暹羅國	三六	二二	六〇
9. メキシコ	三三	三	四〇
10. エスタドライヒ	二五	一	一六
11. イタリア	一〇	一	一四
12. ホルトガル	二	六	一四
13. ベルギー	七	一	七
14. ブラジル	一	一	一
15. オランダ	一	一	一

而して本邦人にして海外旅券を受取りたる者は凡そ三萬三千三百人なる
 が出向地の主なるものはハワイ、韓國、ロシア、アメリカ合衆國、清國等なり
 次に我が國に在留する外國人に就きて記さんに總數は凡そ一萬一千六
 帝國大地誌

1011

百人にして清國人最、多くイギリス人、アメリカ人等之に次げり。

國名	人員	國名	人員
清國	六三〇	韓國	七二
イギリス	三三〇	エストニア	六三
アメリカ合衆國	二六五	スエリゲ	五八
ドイツ	五八六	ノルゲ	五二
フランス	三三三	イタリヤ	三三
ロシア	二二二	ベルギー	二二
ホルトガル	二二二	ブラジル	二二
シウスイツ	二二	メキシコ	二二
オランダ	二〇	ペルー	二二
デンマルク	七〇	ギリシア	二二
エストレルライロ	七〇	其他	二二
ワンガルス	七〇	合計	二一五八

又外國人にして我が國に旅客として來航せし者の總數は凡そ三萬二千

人種、種數

五百人にして清國人最、多く之に次げるものをイギリス人、アメリカ人、ドイツ人、フランス人、ロシア人等なりとす

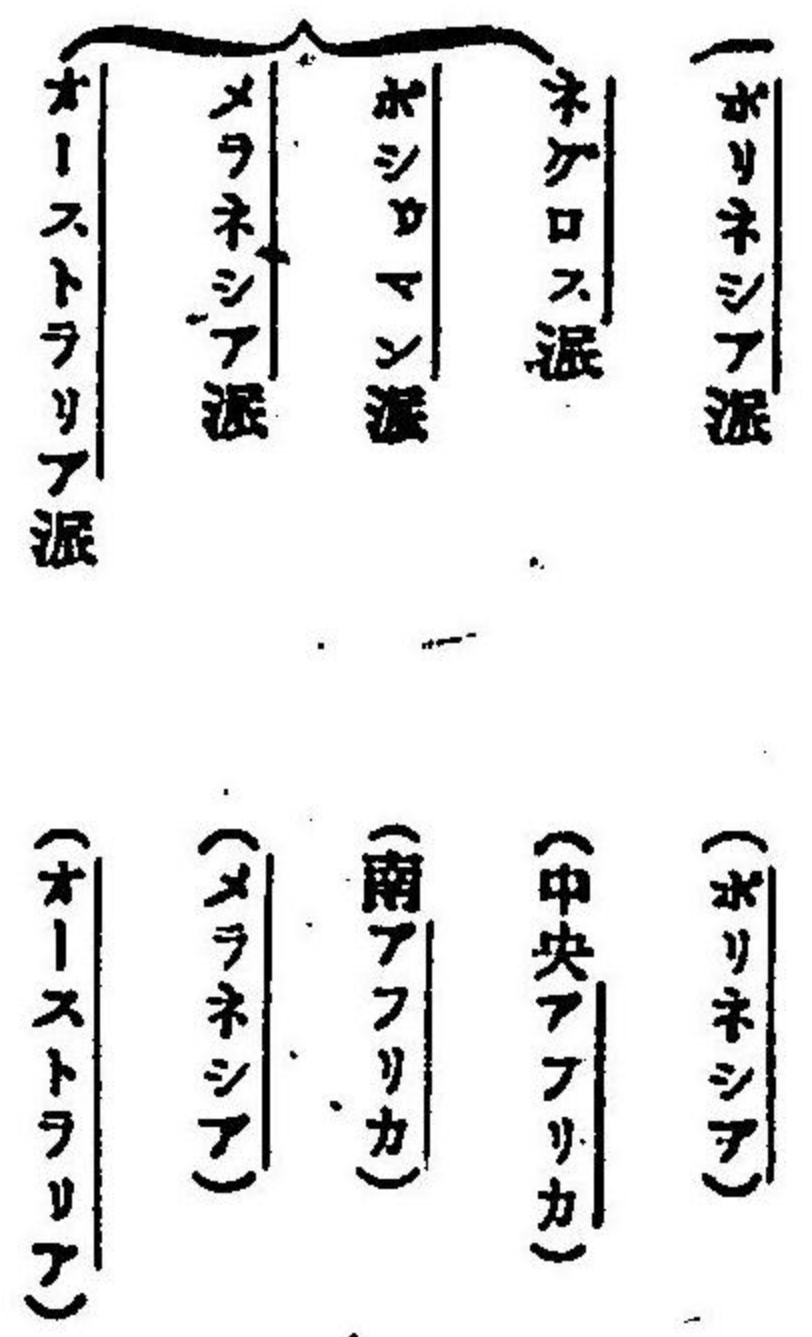
其二 種族

人類は動物界に於て特殊優秀の地位を占むるものなるが、外觀的、解剖的、生理的、疾病的等の如き有形性、若しくは智力的、道義的、信仰的等の如き精神性に基つきて、之を四箇の變種即ち人種に大別し、更に若干の種族に細別せり。今左に一表を作りて世界に於ける人類の分布に就きて大要を指示せり

- 白色人種
 - ヨーロッパ人種と云ひ又
北ヨーロッパ派 (スカンデナヴィア、イギリス、等)
 - コーカシア人種と云ふ
南ヨーロッパ派 (エストニア、ホルトガル、イタリヤ、等)
 - 南西アジア派 (印度、ペルシア、等)
 - 北アフリカ派 (エジプト、ベルベリア、等)
- 黄色人種
 - アシア人種と云ひ又
蒙古人種とも云ふ
蒙古派 (日本、韓國、清國、等)
 - マライ派 (マライ半島、マライ群島、マレシア、等)

帝國大地誌

黒色人種
アフリカ人種とも云ふ



赤色人種
アメリカ人種とも云ふ



茲に國あり其の住民は如何に饒多なるも其の増殖は如何に迅速なるも之が種族單純ならずして言語相通せず或は氣質を異にし或は風俗を同じうせざらんか國民は自一一致協同を缺きて獨りたる和氣の中に共存するを得ざるべし斯る鳥合の民族を以て一國の住人を組成せんか其の強力に幾分かの殺滅を來たさざるを得ざるべし

然るに本邦の住民は大和種族、蝦夷種族、支那種族、臺灣種族の四種族より成るも全國の人口四千六百餘萬に就きて臺灣の住民を控除すれば殘りの

四種族

四千三百餘萬の中にアイヌ人あるも其の數は僅に一万七千餘に過ぎず又西十五万足らずの琉球人あるも歴史と風俗とに些少の差異あるのみ要するに我が國の住人は單一性を備ふる點に就きて多缺くる所なきや明なり

種族	人口		計
	男	女	
大和種族	二,一五九,三五五七	二,一六九,九七四五	四,三二九,三三〇二
琉球人	三三,一五二	三三,六四五七	六六,八〇九
支那種族	一,四三三,六〇八五	二,一〇〇,三三八	三,五三四,九四三
蝦夷種族	八五,六三	九〇,一〇	一七五,七三三
臺灣種族	六,六八〇四	六〇,九〇八	一三,八七三八
熱帯種族	二,六九八八	二,五〇二	五,六六三八
蕃社人	三,九八一六	三,五八八七	八,二二〇〇
合計	三,三三三,六五三〇	三,三六七,六一五八	六,七〇一,二六八八

今茲に此等種族の各に就きて其の言語、氣質、風俗等の梗概を記述せん

言語は吾人獲得の能技にして人類と禽獸との殊別をして明確ならしむる者の一なるが太古より現時に至る間に於て幾多の變異變差を経て全国各地特殊の通語を生じたれば其の主要なるもののみを擧ぐるも二百五十有餘に達せり然れども言語學上より見れば單音語、逆綴語、變動語の三種に大別するを得べしと爲す而して言語を表記せん爲に使用する所の符號即ち文字に就きては形象的に生れ表意的と成り記音的に進むを以て文字發達上の原則と爲せり

氣質とは吾人の特殊なる性情を云ふものなるが其の相同じからざること恰も吾人の面貌に差異の存するが如し斯人によりて氣質を異にする所以のものは極めて錯綜せる事情に基づくなれども其の居住する土地の影響を蒙りたるに起因すること蓋し尠少ならざるべし深山幽谷に人と成るもの、海濱河岸に居をなすもの、都會街衢の如き繁華の地にあるもの、村落僻邑の如き閑雅の地に住するもの、皆各其の氣質氣風を特有せり例すれば高原に生長せしものに尊大自重の風ありて、渺茫たる海洋の濱に住するものに冒險的思想を抱くもの多く、都會に在りて熱鬧喧嘩の間に奔走するものは機敏伶俐の質と成り、村落に居りて靜閑寂寥の地に屏息するものは質

村澤其の風あるが如し然れども人の氣質を鑄造するものは唯に土地の情態に關するのみに非ず、父祖の遺傳、社會の形勢、口碑歴史等の感化は皆直接間接に作用するものなり而して人類が其の天性に則り互に相結びて一國を爲し住居を同じくするか若しくは一定の疆土内に棲息するときは其の團結には一種特別の氣風の現出するものなり故に各自に特有の氣質ある如く一家一國皆各其の固有の氣風を保持せり

第一 大和種族

大和種族は世に黄色人種と云ひ蒙古人種とも稱する人種に屬する一種族なりとす其の相貌は韓國人、清國人、馬來人等に類似せる所あるが有史時代以前より現今の如き民族なりしや否やに就きては未だ確説あるを聞かず一説には本種族を以て土蜘蛛、熊襲、大和の三種族の混同より成れりとせり言語 大和種族固有の言語を本體となし交るるに漢語を以てす地方に依りて多少の轉訛あるを免れざるも互に相通すること能はざるが如きことなし而して地名には往々アイヌ語の遺存するあるを認むるのみならず近時に至りては商業上若しくは學術上等に於て西洋語を交え用ふること

あり、又文字には中古の發明に係る記音的假名文字、あれども名詞語根等には漢字を使ふを常とす、要するに我が日本語は發聲優雅にして音調に怪節少なく、表意上に就きても甚しき困難を感せざるも詞辭に豊富ならずして語句に正確を缺く所あるを免れず、殊に一大缺點とも云ふべきは言語と文章との間に著しき懸隔あるの一事なりとす

氣質。我が大和民族は所謂日本魂と稱する特殊の性情を有し累世相傳へて消滅することなし、然れども茲に其の氣質の長短得失如何に就きて陳述せんとするは頗る至難の事なり蓋し吾人は其の記述せんとする氣質を享有するものなれば公正に批評し能はざればなり、今茲には嘗て外人が我が國民の氣質を評したるものを取りて之を記載せんとす、我が國人は信義を重し忠誠にして尙武の風を有し活潑鋭敏にして頗る思考力に富み勇敢にして進取の志あり、加之技藝に巧にして殊に美術に長じ日本美術の名を宇内に高からしむるに至れり、然れども其の裏面を細に觀察し來れば輕卒にして自重の念乏しく、奇を好み新を追ひ朝に求めて夕に捨つる狀なきに

非ず、良好の慣習も單に舊古に屬すとなし、之を斥け、反つて人の爲に冷笑せらるゝことなきに非ず、思想の變動頗る激しく一定の準律を尊信し之に依憑せんとするの念慮に缺くる所あるが如し、動すれば目前の小利に奔りて永遠の大事に着眼せず、一旦急勢に乗じて熱情するも些少の困難の爲に挫折せらるゝことあるが如し、此等の缺點あるが故に天稟の良徳美質あるに係はらず往々外人の爲に輕侮せらるゝことありと云へり、此等の批評は蓋し其の正鵠を認らざるに近からんか、されば吾が同胞は其の良徳美質に係るものは飽くまで保存して益々之を屬磨すると共に其の惡習偏癖に係るものは削除するの策を講究し國人の品性を善美にし乾坤の大劇場に立ちて競争するも一籌を異邦の人に輸せざるの覺悟なかるべからず

被服。成人曰く凡そ世界に於て數多の人種より成立する國はアメリカ合衆國を第一とし、雜駁なる衣服を着用するの點に於ては我が國を以て最とすべしと、夫れ或は然らんか、現今我が國人の衣服を見るに實に區々にして一定せず、洋服を纏ふものあり、和洋折衷の服を着するものあり、或は古昔

の服式に戀々たるものなきに非ず、其の多數の人の着用する所謂近世の和服なるものは長袖にして労働に便ならざるの嫌あり、従て各人各種の嗜好に放任したるの有様なり、夫れ衣服の制式は其の國の品位に影響すること大なるが故に唯、労働に便なるのみならず其の外見も雅致にして品格良きものを撰ばざるべからず、此等の要素を含める完良の服式を制定して、我が國特有の徽號を世上に表示するは何れの日も在るか

飲食。我が國人の常食は古來、米麥を主品とし、副食物に蔬菜魚肉を用ひ、交ゆるに鳥肉を以てせしが、近頃外國との交通開けしより以來は此等の食物に加ふるに牛豚の肉を以てし一般食物の調理法にも注意し滋養衛生の道に適はしめんことを務むるが故に幾分か食物の改良せる傾向あり、要するに我が國人は濃厚のものを忌みて淡泊のものを愛するが如し、而して飲料は煎茶を主とすれども清酒を嗜む者も亦少なからず

住居。我が國人の住所は平屋若しくは二階造を通常とし、層階の高樓を造るもの鮮なく、暖季に際しては涼風を受くるの便あるも冬季に當りては

防寒の備に欠くる所あり、家屋は概ね木造なれば其の價廉にして建造の容易なる便あるも、堅牢ならざるのみならず又火災に罹り易し、是れ古代の遺物として保存し得たる大層高樓の極めて稀なる所以なり、之を要するに我が國現時の造家法は利害相半するを以て甚だ賞揚すべきものに非ざるや明なり、夫れ斯の如く本邦人の住居は堅固宏大ならざるも、氣候の温暖なる又は風俗の質素なる點より考ふれば或は當を得たるものなるやも未だ知るべからず、然るに近來洋風を稱へ石造若しくは煉化造を營み、寒國の建築を模擬するに至りしが我が國の慣習風俗より觀察し且我が國の殊に地震多き點より考ふるべきは、猥に高層の家屋を造營するは蓋し得策と爲すべからず

第二 支那種族

支那種族は一に漢族と云ひて黄色人種に屬す、臺灣蕃族より後れて臺灣に來住したるものなれども文化の度に於ては遙に優等に位せるを以て、無智蒙昧なる前住者を荒蕪の地たる東方の一部に退け、居を西方と北方

支那種族

どの沃野に占めて遂に現今の情況を呈するに至れり、抑、此の種族が始めて臺灣地方に移住したるは朱明の頃にして其の後、清朝の世と成りては來住するもの愈々多く拓地殖民の業舉がりて益々盛大に趣き臺灣島並に澎湖群嶋を以て一省と爲し三府三廳を置くに至りしなり、されば本種族中に最舊のものは福建省の泉州漳州地方より移住せし閩人にして臺灣平野の最、膏腴なる土地を占め、後年の移住者たる粵人即ち客家は廣東地方より來りたるものにして多くは中央山脈の蕃社に接する地に住す、是れ俗に粵人を指して内山の客人と稱する所以なり、此の外、福州地方より來住したるものあれば其の數著しからず

言語。閩人が用ふる所の厦門土語は最、廣く行はれ普通に臺灣語と稱せらるるものにして、粵人は其の故國たる廣東省の土音を用ふ、而して此の兩語の間には名詞發音措辭等を異にする點多きが故に互に相通すること能はずと云ふ

氣質。本種族は所謂支那人根性を有し勤勉にして勞働を厭はず能く辛

苦に耐え貯蓄に志ざすこと厚きも高尚の思想に乏しく利己主義に傾き易し、而して閩人は詩文を弄し華美を好むの風あるも狡黠にして奸智に長じ、粵人は稍々素樸なる所あれば、卑野にして頑固なり

被服。男子は常服として無地の綿布にて製したる廣濶の上衣と袴とを着け冬季に限り綿入の胴着を加へ、禮装としては長、脛に達する綿布の上衣を着す、一般に頭髮を辮し帽子を戴くも木底の布沓を穿つは中等以上の社會に限り下等の人民は跣足するを常とせり、女子は袖袴を一層廣濶にし多少の裝飾を加へ、頭髮に花簪を挿む、又纏足して小沓を穿つの陋俗あり

飲食。米穀を主食物となし豚、鶏、羊、魚等の肉類及び野菜類を副食物とし好みて菓子、果物を食ふ、而して飲料には紹興酒、其の他、火酒を用ふ、又蒜を嗜み鴉片を喫するの惡習あり

住居。煉瓦を積みて柱となし梁桁には木材を用ひ土塊を重疊して周壁を造り薄瓦を以て家根を葺く、窓は小にして其の數の少なきのみならず軒頭に廣き簷を出だすを以て常となすが故に室内は至りて暗し、而して中等

以上の家屋にありては中庭を設けて表裏の二部となし男子は前部に住み女子は後部に居る又古來匪賊の爲に害を被ること多きが故に門戸障壁等の極めて堅岩なるを常とす

第三 蝦夷種族

蝦夷種族

蝦夷種族即ちアイヌ種族は一に舊土人と云ふ黄色人種に属すと爲すも内地人に比すれば全く別派の種族たるや明なり殊に男子は髪を被り鬚髯甚多く遍身濃毛を生ずるを以て毛人の別稱あるを致せり太古の世にありては本種族が十州嶋は勿論本州嶋の殆ど全部に棲息せしのみならず其の勢力も亦甚々強大なりしが如し然るに大和種族の傳播の盛なるに従ひ漸次に北退して現今の如き情態を見るに至れりアイヌは其の性蒙昧魯鈍なるも温良從順にして誠に可憐の民たり好みて獵漁を事とし稀には耕種を試みるものあれども手藝としては僅に單簡なる器物を製作するに過ぎず

言語 アイヌ語は體言を先にし用言を後にするの點に於ては我が國語

に類すれども語原に就きて考ふるときは全然別派の語を爲せり而して各地に住居するアイヌの言語を對比すれば多少の差異あるを見るも要するに大同小異にして互に相通すること能はざるに至らざるが如し

被服 暖季にはアツシ輪の軟皮を以て製したる織物の單衣を用ひ寒季には熊鹿等の

生皮を着す足に脚絆様のものを着し極寒の季を除き概々徒跣にして履を穿たず雨天に際するも笠を用ふることなし而して大禮祭祀の節には男子は懸力を佩き木屑製の冠り様のものを戴き刺繡にて裝飾したる陣服の如きものを着す又女子は胸間を飾り耳環を用ひ口邊に懸するの風あり

飯食 魚介鳥獸の肉を主食物となし交ふるに草根木實を以てし稀には米麥野菜を用ふることあり而して食するに時を撰ばず久しく飢に堪ふ殊に酒を嗜むこと甚しく亂飲して飽醉連日に亘ることあり

住居 家屋は倭小にして構造は極めて單簡なり概々一室建にして家族多きときは數棟を並設す丸木の棟梁柱等を繩にて結び合はせ茅芦其他の樹皮にて家根を藁草を編みて壁となし茅簷を敷きキナの水草製の座布

團を用ひ寢床には獸皮を敷き周圍に、ヤナ製の簾を懸く
第四 臺灣種族

臺灣種族は臺灣嶋の先住者にしてマライ人種に屬するもの、如し濁水溪を界として南蕃と北蕃とに區別し文化の度に從ひて生蕃と云ひ熟蕃と稱し又擺安、知本、阿眉、平埔の四蕃族となすも、要するに蒙昧未開の民たるを免れず、言語にはマライ語より轉訛したるものを用ふるも地方に依りて大差ありて南北二蕃の共に談ずる能はざるは勿論、隣接する部落の間と雖も相通すること難しと云ふ、文字なく教音の何たるを知らず、僅に漁獵の如き單簡なる生業に依りて幼稚の生活を營むに過ぎず

擺安蕃族は一に山地蕃族と云ふ、生蕃中最、古昔より臺灣嶋に居住したるものにしてマライ人種に屬せるが如し、軀幹偉大にして皮膚は銅色を帯び頭髮は黒くして直し、性質最、悍猛にして怒り易く鬪争を好み、掠奪を縱にし、今猶も頭顱を狩るの風あり、衣服は膝掛の如きものを以て胸部と背部とを蔽ひ、其の上に鹿皮を以て製したる上衣を着し、好みて中央の山脈地方

數千尺以上に達する高處に棲居し、野獸を捕獲し、旁、牧畜に従事するもの、如し

知本蕃族即ち平原蕃族は擺安種族に次ぎて本島に來りしものにて是又マライ人種に屬するが如し、身幹は稍、小にして氣質も亦溫和なり、然れども大體の風俗は野蠻にして擺安種族と大同小異なり、衣服には脛衣と胸當とを用ひ、寒冷の候には牛皮の外套を着し、又文身するの風あり、而して此の種の民族は河岸、海岸に居りて獵獸捕魚を爲すの外、平原に住みて耕作を業とせり、其の他、木工、金工等ありて半開化の種族たるに近し

阿眉蕃族の本島に來往せしは前記の二蕃族の後にして漂流人の子孫なるが如く、或はホルトガル人の後なるべしと云へり、されば身體骨格も他の蕃民と異なり、全身多毛にして筋骨皮肉頗る發達し、風俗習慣も亦異なる所多し、而して他の蕃族の知らざる新年の祭を爲が如き稍、進歩の狀を呈するも社交上、他の蕃族に外人視せられ對等の交際を爲す能はざるは漂流人の後たるの故ならんか

平埔蕃族も亦一の移住民なるも前の三種とは異なりて半開の民族たり支那人の所謂熟蕃なり、體格強壯にして力役を厭はず、性質順良にして頗る活潑なり、能く農事を務め又漁業を好み、されば臺灣島の南部及西部に住して支那人を始め其の他の外國人と共に雜居するを嫌はず、生存競争の場裏に立ちて進化を企むの資を備ふるものと云ふべし、此の種の民族は他の蕃族と異なり、北方の沖繩群嶋より移住したるものなるべしとの説あり

其二 教育

國土は廣大にして天然の物産に豊なるも、人類の養殖して之を利用するに非ざれば其の眞價の得て知るべからざるは既に之を記述せり、然るに人口如何に夥多稠密なるも蒙昧頑陋にして萎縮振はざる性情を有するものなるときは敢て誇るに足らず、寧ろ住人稀少なるも善良の心性を具へ活潑勤勉にして能く勞働に堪え業務を嗜好するものより成るを勝れりとす、夫れ國民をして善良勤勉たらしめんにには教育に依りて之を陶冶養成せざるべ

教育

からず、教育に依りて良民を作り天與の富源を利用し障害を排除し國家をして漸に開明の域に進ましむるは最、緊要なる事業にして即、世に文明なり開化せりと稱せらるる海外諸國が教育に關する各種の施設に汲々たる所以なり

小學校

現今我が國に於ては寒村僻邑に至るまで初等の普通教育を授くる小學校の設けあらざるなく其の數は二萬七千にして通學する兒童の數は四百萬に達せり、蓋し兒童六七歳に至れば之が就學を促し、人倫道德の要領を教へ國民の義務を知らしめ普通の智識技藝を授け以て他日良民と成りて一般の業務に従事し國家の富強を増進せしめんことを期せり、又各府縣に設置せらるる一百六十有餘の中學校に於ては五萬四千餘の生徒に稍進みたる普通の教育を與へて社會の中流以上に立つべき國民を作り、東京、仙臺、京都、金澤、熊本、岡山等に於ける高等學校を始めとし其の他各種の專門學校等の設けありて各自其の好む所の職業に就くに必須なる技能を授くるを旨とし、大學校を東京と京都とに置き深遠なる學理を研究せしむるが故

中學校

高等學校
專門學校

大學校

に碩學彬彬として輩出し文明諸國の學術社會と競争對峙せんとす、特に新
 領土の臺灣には國語學校、師範學校、國語傳習所、小學校、公學校、等を設けて國
 語の普及を企て教化の美果を收めんことを務むるあり、私立の字房、義塾、等
 に於て經書詩文を教授するあり、且又圖書、新聞、雜誌の印行、日に月に進みて
 相互の智識を交換するの機關の漸次に發達するあり、博物館、圖書館、等の設
 置ありて古今の事實を探究するの便あらしむ

夫ハ斯の如く我が國の教育制度は數十年來大に改良を加へ其の秩序整
 然として備はるに至れり、然れども教育の事業たるや宏大なり、單に學齡兒
 童に就きて修學者と不修學者との割合を見るも前途尙々遼遠なるを知るに
 足らん、試に明治三十年未開の統計表を閱みするに學齡兒童百人に付三十
 三人は修學せずして教育の恩澤に浴せざるものなり而して細に學校の種
 類、設備等を觀察し來たらんには轉々感慨に堪えざるものあらん、殊に女子
 の中等教育の如きは僅に其の緒に著きたるに過ぎずして全國を擧げて三
 十餘の高等女學校あるのみ、されば教育の效果の顯著なる實例を目撃せる

今日に放ては吾人は益々教育を振起して之が改良上進を企圖し以て同胞
 をして善美の域に達せしめ皇國の氣運を隆興するに努力せざるべからず

其四 宗教

宗教に就きては茲に其の正邪利害を詳論するの限りに非ずと雖も、是れ
 亦教育の如く人類の發達に關係を有するものなれば敢て漏脱するを得ず
 凡そ世界の各地に居住する人民は文明の度に應じて多少宗教を信奉せり
 蒙昧の時には拜物、宗行はれ、半開の代には多神教あり、先覺せる開化人の一
 神教を信仰するあり

然り而して世界各地の民種中にて宗教に冷淡なるものを擧ぐれば儘に
 指を我が大和種族に屈するなるべし、抑、我が國中古の時代は王公將相に
 して佛門に歸依し神力を崇拜せしもの多く一時宗教の隆盛を極めたるこ
 とありしも現今に至りては宗教に對する感情頗る冷淡にして甚しきは己
 の從屬せる宗派の何たるを知らざるものなきに非ず、海外諸國にては宗教

上の争より延きて國家の禍亂に及ぼし流血杵を漂はすの慘狀を演ずることありしは歴史の明記する處なり然るに我が國に於ては宗教の爲に干戈を動かしたること殆ど無しと云ふて可なり夫れ斯の如く我が國人の宗教に冷淡なるは何故なりや元來我が人心の之に對して殊更に冷淡なる情性を有するに因るべしと雖、夙に儒道の渡來ありたるが爲め宗教の朝野に洽及して一般人心に感染固着したることなきと宗教の分派甚だ多くして統一を缺きたること等は其の原因の主要なるものと見做すを得べきか、要するに世に稱する所の宗教なるものは我が國の人心を結合せしめて道德的の感情を想起せしむるの勢力に乏しと謂ふべし然れども幸にして我が國民をして和協一致せしむるに足るものありて存す古今に通じて悻らず中外に處して驕らざる我が國特有の忠孝彝倫の道は能く我が國民をして徳性を養ひ情操を正しうし品位を高かめ俯仰天地に愧ぢざる良民たらしむるに餘りあり

茲に我が大和種族が信奉する所の宗派の梗概を記述せん先に大別し

神道

て神道佛敎の二となす而して之を細別すれば實に左表の如し

神道 神宮敎 快桑敎 黒住敎 大成敎 御岳敎 禊敎

法相宗

華嚴宗

天台宗

眞言宗

律宗

淨土宗

佛道 融通念佛宗

臨濟宗

曹洞宗

黃檗宗

眞宗

〔天台宗 同寺門派〕

〔眞言宗 同眞義派〕

〔淨土宗 同黒谷派 同眞義派 同眞西派〕

〔臨濟宗 同徳仁寺派 同妙心寺派 同東福寺派 同國覺寺派 同南禪寺派〕

〔曹洞宗 同永平寺派 同持寺派〕

〔眞宗 同佛光寺派 同眞正寺派 同高田派 同出雲派 同山元派 同本願寺派 同誠照寺派 同大谷派 同三門徒派〕

帝國大地誌

日蓮宗 〔日蓮宗 同真門派 同本成寺派 同本隆寺派 同講門派〕
 時宗 〔日蓮宗 同真門派 同本成寺派 同本隆寺派 同講門派〕
 宗 〔日蓮宗 同真門派 同本成寺派 同本隆寺派 同講門派〕
 〔遊行派 一向派 當麻派 四條派〕

宗派の多きこと實に驚くに堪へたり斯る雑多の宗教を以て信徒の心意を一致統合せんと欲するも得べけんや然れども此等の宗教の中に就きて何が最も勢力を有するかと云へば先づ第一に指を眞宗に屈せざるを得ず而して之に次ぐものを曹洞眞言淨土臨濟日蓮等の各宗とす且又此等の宗派が稍盛なる地方を指示すれば次表の如し

- 眞宗 滋賀、大阪、新潟、富山、岐阜、石川、福井、兵庫、三重、福岡
- 曹洞宗 静岡、愛知、山形、新潟、山梨、埼玉
- 眞言宗 埼玉、千葉、和歌山、兵庫、岡山
- 淨土宗 京都、愛知、大阪
- 臨濟宗 静岡、京都、岐阜
- 日蓮宗 千葉、山梨、静岡、東京、京都

神道佛教の外別に基督教あり本教は元來國禁なりしが信教の自由が一

基督教

たび憲法の公認する所と成りしより以來其の傳播漸く盛にして信徒の數既に凡そ數十萬に達せりと云ふ然れども此の宗教も亦四分五裂の姿にて往昔の如く其の勢を逞しうするを得ざるべし茲に本宗の分裂の景況を略述すれば實に左の如し

基督教 〔正教 教派 羅馬派〕
 新教 〔日本教會 メソヂスト教會 組合教會 福音教會 聖公會 長老會 浸禮教會 クリスチアン ケーカール ユニテリアン等〕

儒道は孔孟の教を傳ふるものにして學派には數派あれども其の説く所究めて明確にして素より他の宗教に比すべくもあらず而して此の道を信奉するもの數は著しからざるが如き感あるも我が社會に立ちては其の勢力反つて他の宗派を凌駕せり

支那種族に屬する臺灣嶋の住人中にて多數は儒道を尊信するも又佛教を信じ稀には耶蘇教を奉ずるものなきにしもあらず而して一般に祖先を祀るの風ありて一族共同して家廟を建築し宏壯なる祭場を造り廣潤なる墓地を設く因に記す本種族に屬する人は我が内地に於ける如く分家別居

帝國大地誌

儒道

すること甚々少なきを以て一家の中に群居するもの七八十人以上に達することあり

蝦夷種族は所謂多神教の信者にして「マカンカラカム」即ち造物主を始めとし日月水火河海山岬熊鯨等を神として尊信し殊に熊祭と稱する所の祭典は最も盛なりとす

臺灣蕃族は其の生蕃たると熟蕃たるとに拘らず迷信に基づきて病疫流行の際なほに祈禱を爲すの外宗教として見るべきものなし

●政治

茲に土地ありて人類蕃殖するも未だ一國を成すに足らず一國の名を與ふるには土地と住民との外更に他の要件なからざるべからず即ち一地方に棲息する人類の一團體中上に主權者あり下に被治者ありて然る後始て國と稱するを得べし抑一家には主人なるものありて其の家族を統治し家族は能く主人の命令に服従し始めて圓滿なる一家を形成すべし人家

政治

君主國
共和國

相集まり一の部落を作るに當りては更に此の團體を統治するものなかるべからず是即ち部落に會長ある所以にして國家の未だ發達せざる昔時草昧の世にありては各部落は各地方に割據し會長之を統治し其の主權を握りたるなり然るに星霜を経るに従ひ漸く進化して多數の部落相集まりて大團體を組成し優秀なる人傑を主權者に戴きて其の統治を仰ぎ被治者も能く其の命令に服従し互に權域を護みて始めて昌平安泰の邦家と稱するを得るものなり而して邦家の主權者にして法を布き令を下だすに當り唯、自己の意見にて專斷するあり或は一定の規約に準據し其の範圍内に於て統治の實を舉ぐるあり又主權者にして世襲なるものあり或は被治者の撰舉に係るものあり主權者の世襲なる國は之を君主國と稱し其の主權者を帝若くは王と唱ふ主權者が撰舉に出づる國は之を共和國と稱し其の主權者を大統領と唱ふさて君主國にして政令が君主の專斷に出づる場合に於て其の君主たるもの賢明仁慈なるときは邦家の幸福之に優るものなり若し其の君主たるもの暗愚不肖なるときは邦家の不幸之に過ぐるもの

帝國大地誌

立憲君主國

なし、故に君主專制の國に於ては被治者の禍福は時運に由りて一様ならず
 と知るべし、之に反して共和國は其の主權者たるもの元と被治者の撰擇に
 係るが故に其の主權者にして徳望あるに於ては任滿つるも更に之を推舉
 して永く其の職にあらしめ、若し不仁あるに於ては期を待たずして廢黜す
 るを得る自由なきに非ず、然れども撰舉を行ふに當り或は黨派の策略あり
 或は苞苴の行はるゝありて眞正の價値を有するものを撰出する能はざるこ
 とあり、之に随伴する弊害も亦尠ならず、されば如何なる政體の國を以て
 最良となすか、曰く君主國にして專斷の弊を避け共和國にして撰舉の害を
 免かるゝに足るもの所謂立憲君主國即ち是なり

立憲君主國とは世襲の君主、其の國を統轄するも憲法と稱する永遠有効
 の規約を遵守し政令凡て其の範圍内に止まり決して之に悖反予稱する施
 設を爲す能はざるものなり、而して其の始に憲法を制定するに當り人民の
 協賛に依りて成るもの所謂共約憲法あり、或は君主にして其の臣民の安寧
 慶福を熱望するの餘り權威の一部を割きて臣民に加へ君主と臣民との率

共約憲法

欽定憲法

由すべき條章を明にし君主は之を施行すべき責に任じ臣民には之に服従
 する義務を負はしむるもの所謂欽定憲法あり、是れ就中尊重すべきものと
 す、我が帝國の臣民は實に最、超絶する立憲君主國の下に統治せられ最、尊
 重すべき欽定憲法を奉體するものなり

其一 政體

我が帝國憲法の大要を擧げんに政權を分ちて立法、行政、司法の三となし
 天皇陛下之を總攬し給ふ

立法權

立法權とは法律を制定する權にして之を協贊するものは帝國議會なり
 議會は貴族衆議の兩院より成り各若干の議員を以て之を組織せり、貴族
 院議員は數種より成る第一を世襲議員とす、皇族及び公侯爵是なり、第二
 を互撰議員とす、伯子男爵各一其の同爵中より撰舉す、第三を勅撰議員とす
 國家に勤勞あり又は學識あるものより特に勅任せらる、第四を多額納稅議
 員とす、各府縣に於て多額納稅者の中より一人を互撰す、而して衆議院議員

司法權

は撰舉人たる資格を備ふる所の臣民の撰舉に係るものにして、全國を九十七の撰舉區に分ち三百六十九人の議員を出だすものとす、兩院議員は法律の制定を協賛するの外國庫の收支を調査監督するの任務を帯ぶるものなり

司法權とは法律の實行を監督して犯者を處罰し及び刑事民事に關する訴訟を裁斷するの權能を云ふなり司法權は大審院之を總轄し七控訴院其の下に屬し各府縣に於ては地方裁判所及び區裁判所ありて順次其の下に配せられ以て全國司法の任務を掌るものとす而して斯る任務を帯ぶる官吏を判事檢事の二種とし各裁判所に各若干員を置けり

行政權

行政權は内閣及び外務内務大藏陸軍海軍司法文部農商務逓信の九省を以て中央政廳とし一總督府一道廳三府四十六縣六百四十一郡區を以て地方政廳とし以て全國に於ける各般の行政事務を處理するものとす即ち内閣は帝國の機務に參與し旨を承けて行政各部の統一を保持し外務省は外國に關する政務の施行外國に於ける帝國商事の保護及び外國在留帝國臣民に關する事務を管理し内務省は地方行政議員撰舉警察土木衛生地理神

社宗教出版賑恤救済に關する事務を管理し大藏省は政府の財務を總轄し租稅國債貨幣預金銀行等に關する事務を管理し地方に於ける公共團體の財務を統轄し陸海軍省は陸海軍々政を管理し陸海軍々人軍屬を統轄し司法省は各裁判所及び檢事局を監督し檢察事務を指揮し恩赦復權戶籍に關する事務其他司法行政事務を掌り文部省は教育學藝に關する事務を管理し農商務省は農工商水産林野鑛山發明意匠商標地質に關する事務を管理し逓信省は官設鐵道郵便電信電話航路標識を管理し私設鐵道電氣造船水運陸運に關する事業及び航路船舶海員を監督す此の外別に樞密院を設けて至高顧問府となし會計検査院を置きて帝國の會計を監督せしめ行政裁判所を置きて行政上の爭議を聽かし而して内閣には總理大臣ありて他の國務大臣を率ひて國政を處斷し各省の大臣は入りては内閣の國務大臣と成りて國事に當り出でては專務の長官と成り隸屬せる局課の諸員を統率せり地方にありては臺灣總督府に總督あり北海道廳に長官あり各府縣に知事あり各郡區に長あり離島の地に島司あり

其二 行政區劃

司 法	
大 審 院	<p>遞信省</p> <p>臺灣總督府</p> <p>會計檢查院</p> <p>行政裁判所</p>
控 訴 院	<p>鐵道 管 業 局</p> <p>通 信 局</p> <p>郵 政 局</p> <p>鐵 道 局</p> <p>特 許 局</p> <p>水 產 局</p> <p>特 許 局</p> <p>山 許 局</p>
地 方 裁 判 所	<p>一等 郵 便 局</p> <p>船 司 檢 所</p> <p>港 務 局</p> <p>縣 廳 屬 務 局</p>
	<p>二九七</p> <p>四九七</p> <p>二九六</p> <p>七九三</p> <p>三五八</p>

政

行政

農 商 務 省	文 部 省	司 法 省	海 軍 省
山 南 農 林 局	實 業 學 務 局	普 通 學 務 局	專 門 學 務 局
總 務 局	民 政 局	總 務 局	海 軍 部
海 軍 部	教 育 部	司 法 部	經 理 局
軍 務 局	人 務 局	總 務 局	兵 器 監 部
教 育 監 部	教 育 部	海 軍 部	

大林區署
鐵山監督署

要領
港守
部府

境域の廣大なる邦國にありては百般の行政事務をして圓滑敏捷に運行せしめんには中央に首部を置き各地に支部を設けて其の連絡を緊密にするを以て最良の方法となす、是れ一國の行政に關して特殊の區劃を制定する必要ある所以なり

本邦に於ては往昔より行政的區劃の存するあれども今日の如く整備したるは嘗て見ざる所ならん、されば司法區、陸軍區、海軍區、山林區、土木區、稅務區、郵務區等各種の區劃あるのみならず、大は府縣より小は郡區市町村に至るまで其の數は實に枚舉するに遑わらず、故に最、重要なるもの二三に就きて大體を記述せんとす

(一) 鐵道國

近畿八道諸國の區劃は往昔の國司、守護等の管轄區域の遺跡にして明治の廢藩置縣以前に於ては勿論多少の用ありしも現今の行政上に於ては必須欠くべからざるものに非ず、然りと雖、歷史上若しくは習慣上、其の關係頗る大なるを以て畿内八道諸國に就きて其の大要を知らざるべからず、今

左に一表を作りて鐵道諸國の名稱并に各國の郡市區數を列記したれば就きて見るべし

東		畿内					鐵道國
伊勢 伊賀 志摩 尾張 三河 駿遠		計	山	大	河	和	攝
伊賀 勢 摩 張 河 遠 駿		五	津	泉	内	和	攝
二	〇	一	九	〇	六	五	八
二	〇	一	〇	三	二	七	〇
二	〇	一	〇	三	二	七	〇
二	〇	一	〇	三	二	七	〇
二	〇	一	〇	三	二	七	〇
二	〇	一	〇	三	二	七	〇

東		海						鐵道國		
近江 美濃 飛騨 信濃		計	甲	伊	相	武	安	上	下	常
近江 美濃 飛騨 信濃		五	豆	模	藏	房	總	總	陸	陸
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二
三	一	一	二	九	八	〇	一	五	九	二

陽山					道陰山											
周	安	備	備	備	美	掃	計	隱	石	出	伯	因	但	丹	丹	計
岡	藝	後	中	前	作	磨	八	岐	見	雲	雲	橋	馬	後	波	七
六	七	九	八	六	五	三	三八	四	六	六	三	三	五	五	七	四三
-	-	-	-	-	-	-	二	-	-	-	-	-	-	-	-	五

計合	道海北					道												
計	千	根	劍	北	天	石	十	日	廣	後	渡	計	琉	對	壹	臨		
八	五	二	崎	室	路	見	照	持	勝	高	根	志	崎	三	球	馬	岐	摩
六	三	八	九	五	六	八	六	九	七	七	八	七	六	八	五	二	一	七
五	一													六				一
五	三													二				

道陸北					道山												
佐	越	越	能	加	越	若	計	羽	羽	陸	陸	陸	磐	岩	下	上	
波	後	中	登	賀	前	狹	三	後	前	奥	中	前	城	代	野	野	
一	五	八	四	四	八	三	一四〇	九	〇	九	三	二	四	〇	〇	八	二
-	-	-	-	-	-	-	三	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

海西					道海南					道							
大	日	肥	肥	筑	筑	登	登	計	土	伊	歐	阿	淡	紀	計	長	
隅	向	後	前	後	前	後	前	六	佐	豫	岐	波	路	伊	八	門	
五	八	二	二	四	六	九	〇	六	四七	七	三	七	三	二	九	五	九
-	-	-	-	-	-	-	-	六	-	-	-	-	-	-	五	一	

(二) 府縣道廳總督府

現時に於ける帝國行政上の區劃に就きては三府四十三縣五百三十一郡、二區六嶋廳等を置きて本州嶋、四國嶋、九州嶋並に琉球諸嶋等を管せしめ、一道廳三區十八支廳を設けて十州島及び千嶋列嶋を管せしめ、一總督府三縣三廳二十五辨務署を設けて臺灣嶋及び澎湖群嶋を管せしむ

而して市町村に就きては五十二市、九百八十四町、一萬二千六百七十三村なるが別に北海道に三區百八十七町、五百九十八村ありて沖繩縣に二區五郡、五百六十三村あり

府縣	國名	市郡數	市郡名	面積	現住人口	廳地
東京府	東京	一市	東京			東京
武藏	荏原、豐多摩、北豐嶋、南足立、南葛飾、西多摩、南多摩、北多摩	八郡				
伊豆七嶋	〔大嶋〕利嶋、新嶋、神津嶋					

府	京都府	大阪府	府
〔小笠原嶋〕	山城	丹波、丹後	攝津
一市	八郡	五郡	一市
三宅嶋、御倉嶋〔八丈嶋〕	京都、愛宕、葛野、紀伊、乙訓、宇治、久世、綴喜、相樂、南桑田、北桑田、船井	天田、何鹿、加佐、與謝、中、佐野、熊野	大阪
父嶋 <small>兄弟島</small> 、母嶋 <small>向島</small> 、妹嶋 <small>平島</small>		西成、東成、三嶋、豐能	
	二九二、八五	二〇〇、九	
	九九、七四八	一六〇、〇九三	
	京都	大阪	

神奈川縣

兵庫縣

縣 庫 兵					縣 川 奈 神	
淡路	丹波	但馬	播磨	攝津	相模	武藏
二郡	二郡	五郡	十三郡 一市	三郡 一市	八郡	三郡 一市
津名三原	多紀 氷上	城崎 出石 養父 朝來 美方	赤穂 多加 明石 美濃 加東 加西 加古 神戶 姫路	武庫 川邊 有馬	足柄上 足柄下 津久井 愛甲	久良岐 橋樹 都筑 橫濱
		五三三、七六			一五〇、四〇	
		一七一、七六三			九三、六八八	
		神戸			橫濱	

一四四

長崎縣

新潟縣

埼玉縣

縣 崎 長		縣 潟 新		縣 玉 埼
肥前	壹岐	對馬	越後	武藏
一市 六郡	一郡	二郡	一市 十五郡	九郡
長崎 西彼杵 東彼杵 北高來 南高來 北松浦 南松浦	壹岐	[上縣下縣] 新潟 東蒲原 西蒲原 中蒲原 北蒲原 南蒲原 古志 北魚沼 中魚沼 南魚沼 三嶋 荻羽 東頸城 中頸城 西頸城 岩沼	佐渡	北足立 入間 比企 秩父 兒玉 大里 北埼玉 南埼玉 北葛飾
二五三、七六			八二七、九六 一七四、五六二	二四九、一一五、二八三
九〇、二四三				
長崎			新潟	浦和

帝國大地誌

一四五

千葉縣

茨城縣

群馬縣

栃木縣

奈良縣

三重縣

一四六

縣 馬 群		縣 城 茨		縣 葉 千		
上野	下總	常陸	下總	上總	安房	
十二郡	三郡	十一郡	六郡	五郡	一郡	
新田 邑樂 佐波	勢多 群馬 多野 北甘樂	筑波 稻敷 眞壁	香取 匝筈 海上	千葉 東葛飾 印旛	安房	
	前橋 高崎	東茨城 西茨城 那珂 久慈		君津 夷隅 市原 長生 山邊		
三九四、六五		二九五、三三		三三八、四七		
八三〇、三三三		一一四、九五九		二七五、三六六		
前橋		水戸		千葉		

縣 重 三				縣 良 奈		縣 木 栃	
紀伊	志摩	伊勢	伊賀	大和	下野		
二郡	一郡	十郡	二市	十郡	一市	八郡	一市
北牟婁 南牟婁	志摩	安濃 一志 飯南 多氣 度會	津 四日市	奈良 添上 山邊 磯城 宇陀	宇都宮	河內 芳賀 鹽谷 那須	足利 安蘇 上都賀 下都賀
		三五、二二八		二五八、三三		四二六、二五	
		九九、六六四		五三、五六一		八三、九六〇	
		津		奈良		宇都宮	

帝國大地誌

一四七

長野縣

岐阜縣

滋賀縣

帝國大地誌

長	岐阜縣		滋賀縣		縣
	飛驒	美濃	近江		
一市	三郡	一市 十五郡	一市 十二郡	九郡	
長野 南佐久 北佐久 小縣 諏訪	大野 益田 吉城	岐阜 稻葉 羽嶋 海津 養老 不破 安八 揖斐 本巢 山縣 武儀 郡上 加茂 可兒 土岐 惠那	東淺井 蒲生 伊香 高嶋 甲賀 犬上 野洲 愛知	滋賀 栗太 神崎 坂田 大津 北巨摩 南都留 北都留	西八代 南巨摩 中巨摩
		七〇六〇一	三六二〇		
		九七、七九三	六九、四〇六		
		岐阜 阜	大津		

一四九

山梨縣

靜岡縣

愛知縣

山梨	靜岡縣			愛知縣	
甲斐	遠江	駿河	伊豆	三河	尾張
一市	六郡	一市 五郡	二郡	十郡	九郡 一市
東山梨 西山梨 東八代	磐田 濱名 引佐	榛原 小笠 周智	靜岡 駿東 富士 庵原 安倍 志太	賀茂 田方	愛知 東春日井 西春日井 丹羽 葉栗 中嶋 海東 海西 知多
				寶飯 渥美 八名	碧海 幡豆 額田 西加茂 東加茂 北設樂 南設樂
二九、六三三		四九五、二八		三一九、一五	一六三、九六一
五〇、六四七		一一〇、三三三			
甲府		靜岡		名古屋	

一四八

宮城縣

福島縣

岩手縣

青森縣

山形縣

縣 島 福		縣 城 宮		縣 野
岩代	磐城	磐城	陸前	信濃
十郡	一市	七郡	十三郡	一市
南會津 北會津 耶麻河沼 大沼	若松 信夫 伊達 安達 安積 岩瀨	石城 雙葉 相馬	刈田 伊具 亘理 仙臺 柴田 名取 宮城 遠田 栗原 登米 桃生 牡鹿 本吉 黒川 加美 志田 玉造	上伊那 下伊那 西筑摩 東筑摩 南安曇 北安曇 更科 埴科 上高井 下高井 上水内 下水内
八九五、二五	一〇九、八〇三		八三、八二	八七八、七五 二六、四九一八
福島	仙臺		長野	

一五〇

縣 山		縣 森 青		縣 手 岩	
羽前	陸奥	陸奥	陸前	陸中	
二市	八郡	一郡	一郡	十一郡	一市
西置賜 東置賜 南置賜	最上 東田川 西田川	山形 米澤 南村山 北村山 東村山 西村山	弘前 青森 東津輕 西津輕 中津輕 南津輕 北津輕 上北 下北 三戸	盛岡 岩手 紫波 稷貫 和賀 江刺 西磐井 東磐井 膽澤 上閉伊 下閉伊 九戸 氣仙	二市 二戸
五九七、三三	八二七、一八	六三七、一八	六一七、五三	一〇九、四三	七、八七三
山形	青森		盛岡		

帝國大地誌

一五一

岡山縣

島根縣

鳥取縣

帝國大地誌

岡		縣 根 島				縣 取 鳥			縣 山
	美作	隱岐	石見	出雲	伯耆	因幡	越中		
一市	五郡	四郡	六郡	六郡	三郡	三郡	八郡		
岡山	眞庭 苦田 勝田 英田 久米	〔海士 周吉 穩地 知夫〕	那賀 美濃 鹿足	大原 八束 能義 仁多 大原 簸川 飯石	松江 東伯 西伯 日野	鳥取 岩美 八頭 氣高	上新川 下新川 中新川 氷見 婦負 射水 東礪波 西礪波		
			四三、四四	四三、四四		三三、八五	二五、九一		
			七、六五、六	七、六五、六		三三、〇〇	七六、六〇七		
			松江	松江		鳥取	富山		

一五三

富山縣

石川縣

福井縣

秋田縣

富	縣 川 石		縣 井 福		縣 田 秋		縣
	能登	加賀	越前	若狹	陸中	羽後	羽後
二市	四郡	四郡	八郡	一市	一郡	八郡	一市
富山 高岡	羽咋 鹿嶋 鳳至 珠洲	江沼 能美 石川 河北	金澤 南條 今立 丹生 敦賀	福井 足羽 吉田 坂井 大野	三方 遠敷 大飯	鹿角 由利 仙北 平鹿 雄勝	秋田 南秋田 北秋田 山本 河邊
				三三、七〇		七三、四三	
				六三、二四、六八		七八、一二、九	
		金澤		福井		秋田	

一五二

和歌山縣 德島縣 香川縣 愛媛縣

帝國大地理

縣	和歌山縣	德島縣	香川縣	愛媛縣
長門	紀伊	阿波	讚岐	伊豫
五郡	一市七郡	一市十郡	二市七郡	一市十二郡
厚狹 豐浦 美禰 大津 阿武	和歌山 海草 那賀 伊都 在田 日高 西牟婁 東牟婁	德島 名東 勝浦 那賀 海部 名西 板野 阿波 麻植 美馬 三好	高松 丸龜 大川 木田 香川 小豆 綾歌 仲多度 三豐	松山 宇摩 新居 周桑 越智 温泉 伊豫 上浮穴 喜多
	二九三、四六	二六九、〇五	一一〇、八〇	三六三、三九
	六七、三三五	六八、八三三	六九、三三〇	九九、五〇一
	和歌山	德島	高松	松山

一五五

廣島縣 山口縣

縣	廣島縣	山口縣
備前	備後	安藝
六郡	一市九郡	一市六郡
御津 赤磐 和氣 邑久 上道 兒嶋	尾道 御調 世羅 深安 沼隈 苜品 神石 甲奴 雙三 比婆	廣島 安藝 佐伯 安佐 山縣 高田 加茂 豐田 大嶋 玖珂 熊毛 都波 佐波 吉敷
四四五、〇七	五四五、六四	三九〇、四八
一一三、五八二六	一四四、九六三	九七、九五九六
岡山	廣島	山口

一五四

鹿兒島縣 宮崎縣 熊本縣 佐賀縣

帝國大地誌

鹿	縣崎宮	縣本熊	縣賀佐	縣分
大隅	日向	肥後	肥前	豐後
五郡	八郡	一市 十二郡	一市 八郡	十郡
姶良 贈嶽 肝屬 熊毛 〔大嶼〕	宮崎 南那珂 北諸縣 西諸縣 東諸縣 兒湯 東白杵 西白杵	飽託 宇都 玉名 鹿本 久摩 菊池 阿蘇 下益城 上益城 八代 葦北 天草	佐賀 神崎 三養基 小城 佐賀 神崎 三養基 小城 東松浦 西松浦 杵嶋 藤津	西國東 東國東 速見 大分 北海部 南海部 大野 直入 玖珠 日田
	五〇五、四〇〇	四八四、三一一	一五七、一七	四一七、六四
	四六、四五一〇	一一五、六三〇	六一、八六七九	八三、五九一七
	宮崎	熊本	佐賀	大分

一五七

大分縣 福岡縣 高知縣

大	縣	岡	福	縣知高	縣
豐前	豐前	筑後	筑前	土佐	
二郡	四郡 二市	六郡 一市	九郡 一市	七郡 一市	
下毛 宇佐	企救 田川 京都 筑上 小倉 門司	浮羽 三井 三潞 八女 山門 三池	久留米 朝倉 筑紫 糸嶋 早良 精屋 宗像 遠賀 鞍手 嘉穂 福岡	長岡 香美 安藝 土佐 幡多 高岡 吾川 高知	東宇和 西宇和 南宇和 北宇和
		三三、四一七		四八四、九六	
		一〇三、五六三五		六二、二九五〇	
		福岡		高知	

一五六

道											
海											
增毛	宗谷	上川		空知	小樽		岩内	壽都	檜山		松前
天鹽	北見	天鹽	石狩	石狩	後志	後志	後志	後志	後志	渡嶋	渡島
五郡	四郡	一郡	一郡	四郡	七郡	一區	二郡	四郡	四郡	二郡	一郡
增毛	宗谷	上川	上川	空知	古平 小樽 高嶋 忍路 余市	小樽	岩内 古宇	壽都 島牧 歌樂 磯谷	久遠 太樺 瀬棚 奥尻	檜山 爾志	松前
留萌	枝幸			夕張	美國 積丹						
苫前	利尻			雨龍							
天鹽	禮文			樺戸							
中川											
面積 八五、九五三											
現住人口											
札幌											

北										
函館	渡嶋		札幌		石狩	支廳				
膽振	渡嶋	渡嶋	膽振	石狩	石狩	國名				
一郡	三郡	一區	一郡	四郡	一區	區郡數				
山越	龜田	函館	千歲	札幌	札幌	區				
	上磯			石狩		郡				
	茅部			厚田		名				
				濱益		面積				
						現住人口				
						廳地				

縣繩沖	縣島兒	
琉球	薩摩	
五郡	七郡	一市
島尻	薩摩	鹿兒島
中頭	伊佐	日置
國頭(宮古)	出水	揖宿
(八重山)		川邊
面積		五九、五二二
現住人口		二〇、八七一
廳地		鹿兒島

廳							
紗那	根室	河西	釧路	浦河	室蘭	網走	
千嶋	千嶋 根室	十勝	釧路	日高	膽振	北見	
四郡	五郡 五郡	七郡	六郡	七郡	六郡	四郡	
紗那 振別 擇捉 藍取	國後 色丹 得撫 新知 占守	十勝 當麻 廣尾	阿寒 川上 厚岸	釧路 白糠 足寄	浦河 沙流 新冠 靜内	室蘭 有珠 此田	網走 斜里 常呂 紋別

臺灣總督府					
廳		縣			縣廳
臺東	宜蘭	臺南	臺中	臺北	
澎湖	臺東	宜蘭	臺南	臺中	臺北
媽宮 湖西 大赤坎 小池角 網按	卑南 成廣澳 璞石閣 花蓮港	羅東 叭哩沙 利澤簡 蘇澳	宜蘭 礁溪 頭圍 東港	東港 恒春 蘇荳 嘉義 鹽水港	臺南 大目降 蕃薯寮 鳳山 阿猴
			斗六 北港 苗栗	臺中 南投 彰化 北斗	臺北 三角湧 景尾 桃子園 滬尾 基隆 水邊脚 新竹
					辨務署 は符を附したる 出張所なり
一四、三三	二四八、〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	三三、〇〇〇	二七、八、六三
四、九七、八七	四、八三、八一	一〇、八、七三三	九、六、七、五三三	八、二、四、九四	七、一、三、三三
媽宮	南鄉	宜蘭	臺南	臺中	臺北

前記の表に依れば府縣の中面積に就きては岩手一〇三九、福島八九五、長
帝國大地誌

野(八七八)、新潟(八二八)、秋田(七三四)、岐阜(七〇六)等を以て最大となし、香川(一一八)、大阪(一二〇)、東京(一三八)、沖繩(一四三)、神奈川(一五〇)、佐賀(一五七)等を以て最小なりとす、而して現住人口に就きては東京(二〇七)、新潟(一七四)、兵庫(一七〇)、愛知(一六三)、大阪(一五九)、廣島(一四五)、福岡(一四二)等を最多とし、鳥取(四二)、沖繩(四五)、宮崎(四六)、山梨(五〇)、奈良(五三)、高知(六二)等を最少とす、又人口の粗密即ち一方里に付きての口數に關しては各府縣中、東京(一、五四九〇)、大阪(一、二九九五)、香川(五九六三)、神奈川(五五九〇)、愛知(五〇九二)、埼玉(四三三四)、福岡(四二七二)等は最、密にして岩手(七八二)、宮崎(九三五)、青森(九八九)、秋田(一〇〇四)、福島(一二五四)、高知(一三三九)等は最、粗なりとす

(三) 司法區

各種裁判廳の管轄區域に就きて記さんには大審院は全國を總轄し、其の下に七箇の控訴院あり、四十九箇の地方裁判所は控訴院の分管する所にして、各地方裁判所は又若干づゝの區裁判所を管轄するものなるが、其の總數は三百一に達せり、而して臺灣には覆審法院及び三箇の地方院を置く

司法區

控訴院	地方裁判所	區裁判所
東京	〔東京〕 横濱 千葉 水戸 宇都宮 浦和 〔前橋〕 靜岡 甲府 長野 新潟	七〇
大阪	〔京都〕 大阪 奈良 神戸 岡山 大津 福井 金澤 〔富山〕 和歌山 徳島 高知 松山 高松	八四
名古屋	名古屋 安濃津 岐阜	二〇
廣島	廣島 山口 松江 鳥取	二七
長崎	〔長崎〕 佐賀 福岡 大分 〔熊本〕 鹿兒島 宮崎 那覇	四八
宮城	仙臺 福島 山形 盛岡 秋田	三四
函館	青森 函館 札幌 根室	一八

其三 兵備

内亂を鎮め外寇を防ぎて邦國の安寧を維持し權威を宣揚せんには主として兵備に力を用ひざるべからず、而して我が國の兵備は海陸の兩軍より成りて陸軍は陸地を警衛し海軍は領海を防護するの任に當れり、又陸海の軍人には帝國臣民にして滿十七歳以上滿四十歳までの男子より徵集した

兵備

兵役

帝國大地誌

るものを以て之れに充つ而して。兵。役は常備(陸軍現役三年、豫備四年四月)後備(五年)補充(陸軍第一七年四月、海軍一年)國民第二(國民第一に分たるるが實に帝國臣民が國家の爲に盡すべき義務の一なりとす)

(一) 陸軍

陸軍に六種の兵あり、第一を歩兵とす、是れ兵の主なるものにして攻撃防守に拘らず専ら戦闘するを任務とす、第二を騎兵とす、軍令を傳達し敵狀を偵察し或は攻圍を破りて血路を開く等の任務を帯び、第三を砲兵とす、砲戰を用ひて彈擊に従事し敵の軍氣を阻遏し或は城堡壘壁を破壊する等を務とす、第四を工兵とす、胸壁を築き溝濠を穿ちて防守に利し攻撃に便し橋梁を架し道路を脩して交通を開き或は地雷火を裝置して敵を塵殺する等を務む、第五を輜重兵とす、糧食、彈藥等を運搬するを司る、此の歩騎砲工輜重を陸軍の五兵とす、而して此の他に憲兵なるものあり、兵士をして軍紀軍律を嚴守せしむるを務とす

我が國に於ける平時の陸軍軍人は士卒を合はせて凡そ十二萬五千人にし

陸軍
兵種

總數

て豫備に凡そ十一萬七千人、後備に凡そ七萬五千人あるを以て戰時には凡そ三十二萬の精兵を得るなり、而して陸軍の爲に要する費金は一ヶ年凡そ三千三百萬圓とす

今ロシア國外七ヶ國の陸軍に就きて一表を作りて之を左に録せり

國名	平時	戰時	年費額
ロシア	八五〇〇〇〇人	三五〇〇〇〇人	二五〇〇〇〇〇〇円
ドイツ	五五〇〇〇〇	二五〇〇〇〇〇	二一〇〇〇〇〇〇〇
フランス	五三〇〇〇〇	二四〇〇〇〇〇	二一五〇〇〇〇〇〇
エスタリアイヒ ヴンガルス	三五〇〇〇〇	一八〇〇〇〇〇	一七〇〇〇〇〇〇〇
イタリア	二八〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇	一六〇〇〇〇〇〇〇
イギリス	二五〇〇〇〇	八〇〇〇〇〇	一五〇〇〇〇〇〇〇
トルコ	一八〇〇〇〇	八〇〇〇〇〇	五〇〇〇〇〇〇〇〇
エスパーニア	八〇〇〇〇〇	一八〇〇〇〇〇	四五〇〇〇〇〇〇〇

師管區
聯隊區
警備隊區

第一師管區

軍隊が國防の任務に當るの便宜又は各種兵員の徵募上の都合に據り帝國海島及び澎湖を十二師管區に分ち更に之を五十二の聯隊區に細別し小笠原島佐渡隠岐對馬五島大島沖繩等の離島には警備隊區を置けり

陸軍區

師管聯隊區	管轄府縣	面積	人口
第 一	麻布 東京十區 五郡 伊豆七島 神奈川二郡	一三六〇九	一四二、九八四
第 二	橫濱 神奈川二郡 山梨	四二四、三三三	一三六、八三二
第 三	高崎 群馬 埼玉五郡	五五八、八一	一三六、九三〇
第 四	長野 長野	八七八、七五五	一三二、四一五
第 五	佐倉 千葉	三三八、四九九	一三五、四二五
第 六	水戸 茨城一市 十一郡	三三四、四七七	一四五、二七八

一六六

第二師管區

第 一	第 二	合計
本郷 東京五區 三郡 埼玉四郡	仙臺 宮城一市 十三郡 福嶋二郡	合計
宇都宮 栃木 茨城三郡	福嶋 福嶋一市 十五郡 新發田 新潟一市 七郡 柏崎 新潟八郡 *佐波	合計
面積 一〇三、七二二	面積 四六三、九九九	面積 三三三、八三三
人口 一三六、一七九	人口 八七三、〇二五	人口 一、〇一〇、〇〇二

帝國大地誌

一六七

第三師管區

第四師管區

第 三		第 四	
名古屋	愛知一市九郡	大阪	大阪二市六郡
津	三重一市十三郡	滋賀	滋賀二郡
豊橋	愛知十郡	和歌山	和歌山二郡
静岡	静岡三郡	兵庫	兵庫二郡
静岡	静岡一市十郡	京都	京都一市八郡
合計	112,108	合計	112,108
	100,700		100,700
	30,665		30,665
	2,990		2,990
	1,757		1,757
	87,335		87,335

第五師管區

第六師管區

第 五		第 六	
奈良	奈良一市八郡	熊本	熊本一市九郡
廣島	廣島一市八郡	大村	長崎一市六郡
尾道	廣島一市九郡	鹿兒島	鹿兒島一市七郡
山口	山口十郡	合計	101,046
山口	山口十郡	合計	101,046
廣島	廣島五郡		8,525
廣島	廣島五郡		8,525
合計	101,046		101,046
	101,046		101,046
	8,525		8,525
	3,661		3,661
	2,310		2,310
	1,483,550		1,483,550

帝國大陸

第七師管區

第 六		第 七	
函 館	札 幌	合 計	宮 崎
後 志 八 郡	日 高 一 區 膽 振 七 郡 後 志 一 區 石 狩 一 區	對 馬 五 島 沖 繩 大 島	鹿 兒 島 三 郡 宮 崎
五〇六三四	一五八三、六八	一八四二、一四	七〇三、六五
二五、八二七八	三八、〇四三五	三七七、二八九	三、一〇二

一七〇

第八師管區

第 七		第 八	
旭 川	釧 路	合 計	盛 岡
石 狩 一 郡 天 鹽 北 見	釧 路 十 勝 根 室 千 島	青 森 二 郡 岩 手 一 市 岩 手 一 市 宮 城 三 郡	宮 城 三 郡
一六六九、八五	三三七、一六	五九八七、〇三	九九六、五五
九〇九七五	六四九九九	七九、四六八七	八三、四三三四

一七一

帝國大地誌

第九師管區

第十師管區

第	第			八		
福知山	合計	九	富山	金澤	山形	秋田
福知山 兵庫七郡 福井三郡	合計	岐阜 岐阜一市 十二郡	富山 富山 岐阜三郡	金澤 石川	山形 山形	秋田 秋田
四四三、一六	一四四〇、三八	五七、七四	三三、〇一	二七、二七	三三、〇五	七五、四九
七九、三九六	二九九、六二二	七三、三六六	七五、八五七	七五、〇三三	二九、六二七	七九、三三三

第十一師管區

第	十			一		
九	松山	德島	高知	鳥取	姫路	神戸
九	松山 愛媛	德島 德島	高知 高知	鳥取 鳥取 岡山五郡	姫路 岡山一市 六郡	神戸 兵庫一市 六郡
二六、九〇五	三六、三三九	四八、四九七	一三、七二六	四七、九二四	二六、八四五	二八、九〇〇
六八、〇三三	九七、七〇三	六二、二八三	三三、〇三三	七九、〇四七	九〇、三三三	七二、三二二

帝國大地誌
參謀本部は國防及び用兵の事を掌り、陸軍大學校、陸軍測量部、陸軍文庫、在

第二十第 (倉小)	第十第 (龜九)	第十第 (路姫)
第十二(小倉) 第二十四(久米留)	第十(松山) 第二十二(九龜)	第八(姫路) 第二十(福知山)
第十四(小倉) 第四十七(小倉) 第二十四(福岡) 第四十八(久留米)	第十二(九龜) 第四十三(九龜)	第十(姫路) 第三十九(姫路) 第二十(福知山) 第四十(鳥取)
第十二(小倉)	第十一(九龜)	第十(姫路)
下の關		舞* 鶴
第二十第	第十第	第十第

第九第 (澤金)	第八第 (前弘)	第七第 (幌)
第十八(敦賀) 第六(金澤)	第十六(秋田) 第四(弘前)	田屯 步兵大隊
第十九(敦賀) 第三十五(金澤) 第七(金澤) 第三十六(鯖江)	第十七(秋田) 第三十二(山形) 第五(弘前) 第三十一(弘前)	第一 石狩國兩郡 第二 同 空知郡 第三 天鹽國上川郡 第四 北見國常呂郡
第九(金澤)	第八(弘前)	騎兵隊 砲兵隊 工兵隊 (空地)
第九第	第八第	第七第

外陸軍武官を統轄す。都督部は帝國を東部中部西部に分管して防禦計畫に任じ國防の事に參與し、教育總監部は陸軍全般教育の齊一進歩を規畫し砲工學校、士官學校、中央幼年學校、地方幼年學校、戶山學校等を管理す、其の他、兵器監部、砲兵工廠、兵器廠等を設けて軍器の監査製造貯藏等を掌らしめ、軍醫學校、經理學校、獸醫學校等を置きて軍屬の諸員を教養せしむ

(二) 海軍

我が帝國は島嶼より成りて四面に滄海を繞らすを以て特に海軍の整備を望まざるべからず、夫れ海軍は自ら戰鬪者と成りて敵國の艦船に反抗し砲臺を擊破するの務りあるのみならず、又自國の運送船を掩護するの任を帯ぶることあり、而して海軍は海戰を目的とするが故に軍艦の設備を必要とす、軍艦には數種あり、第一種を甲裝戰艦とす、此の種の軍艦は専ら戰鬪に従事すべきものなるが故に其の防禦的構造が堅牢たるを要するのみならず、又攻撃的機關も強大ならざるべからざるを以て恰も海上に浮泳する砲臺の如き觀なかるべからず、第二種を海防艦とす、是れ亦戰鬪に従事するも

海軍

海軍

主として海岸の防禦を目的とし巨砲を備へて敵の來襲に應ずるものなり、第三種を巡洋艦とす、常に海洋を巡邏して敵の運送船を捕獲し或は中立國にして戰時禁制品を運搬する如き者を取締るを目的とす、從て此の種の船艦には戰鬪力よりは寧ろ速度の敏捷を尙ふものとす、第四種を砲艦とす、此の艦は體形小にして自由に隘海淺河に出入すべく巧に砲礮を使用して敵堡を擊破し又は警備艦と成りて重要な商港を警護する等を目的とす、即ち戰鬪艦の補助と成るものなり、其の他に水雷艇あり體形最も小にして進退に便にし水雷を放ちて巨大の艦艦を粉碎する等の任務を帯ぶ、又水雷驅逐艇ありて水雷艇の來襲を防ぎ、通報艦ありて軍令の傳達、敵情の偵察等を掌り、練習艦ありて士官、下士卒等の訓練に供用し、測量艦ありて海深、海底等を測定せり

軍艦表

艦種	隻數	排水量	馬力	速力	砲		水射管	乗組
					通常	速射		
一 初 日 瀬	一	一、五〇〇	一、三〇〇	一八	四	四	四	四

